

### 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

本章では、神画にはどのような内容が描かれ、異なるミエン地域の神画の内容にはどのような異同があるのかについて、詳細な読み取りにより明らかにする。これまでの先行研究では、神画に描かれている内容に関する読み取りは行われているものの、複数の異なるミエン地域の神画の比較は行われておらず、単に、特定地域の神画に描かれる神々についての簡単な論述に留まっている<sup>1</sup>。本論では、先行研究を踏まえつつも、更に厳密に神画の特徴を把握するため、神画に描かれる内容をより細分化して項目に分け、表で示し、分析を行う。別冊の表1から表19に示すように、それぞれの神画に描かれる内容を、主神と脇侍、配置、顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色などの項目に分け設定した。異なるミエン地域の神画資料11組約180点を表に示した。本章の第1節では、この11組の神画資料の基本情報について紹介し、表の分析を通して、異なるミエン地域に用いられている複数の同種の神画に描かれる内容の異同を明確にする。また、神画には銘文が記されているものがある。銘文には、神画を新たに制作した際の依頼者、絵師、神々に対する祈願、神画の開光儀礼が行われた日付などが記されている。この銘文の分析から、神画の制作及び制作の目的を考察する。以下、まず分析に用いる神画資料について紹介する。

#### 第1節 分析に用いる神画資料について

本論で分析に用いる神画資料は全部で11組ある。これらの神画資料は、神奈川大学ヤオ族文化研究所から提供されたもの、筆者が現地調査の際に独自に収集したものがある。以下、それぞれの神画資料の入手経路に関して述べる。

第1項の中国・湖南省永州市藍山県匯源瑤族郷湘蘭村神画、第2項の中国・湖南省永州市藍山県匯源瑤族郷荊竹坪村寒鷄沖組神画、第3項の中国・湖南省永州市藍山県所城鎮団源村神画、第9項のタイナン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村神画で紹介する神画の写真資料は、全て神奈川大学ヤオ族文化研究所から提供されたものである。

第1項～第3項の神画資料は、神奈川大学ヤオ族文化研究所が課題「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の総合的研究」（2008年～2012年科学研究費補助金（基盤研究（B）研究代表廣田律子））及びトヨタ財団2009年度アジア隣人プログラム特定課題「アジアにおける伝統文書の保存、活用、継承」企画題目「中国湖南省永州市藍山県のユーミエンの度戒儀礼に使用される儀礼文献・儀礼文書の保存と活用と継承」のプロジェクトにより、2008年11月24日～12月12日に湖南省永州市藍山県匯源瑤族郷湘蘭村で行われた度戒儀礼の調査、2010年4月28日～5月5日に同村で行われた第2回度戒儀礼の補足調査、2011年11月14日～22日に湖南省永州市藍山県所城鎮幼江村で行われた還家願儀礼の調査の際に撮影されたものである。さらに、神奈川大学ヤオ族文化研究所が、課題「ヤオ族の儀礼と儀礼文献の保存・活用・継承」（2012年～2014年科学研究費助成事業（基盤研究（B）研究代表廣田律子））において、2013年2月9日～12日に湖南省永州市藍山県

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

湘蘭村で春節調査を実施したが、その際趙金付氏が撮影した荊竹坪村寒鶏沖組に住む祭司の盤保古氏が所有している神画の写真資料をもらった。

第9項の神画資料は、同プロジェクトで2014年1月3日～1月8日に、北タイナーン県ムアン郡ナムガムガオ村で男性の通過儀礼である掛灯儀礼調査を実施した際に、撮影されたものである。

また、第11項の神画資料は、同プロジェクトで2014年7月7日～8日に、愛知県の南山大学人類学博物館が所蔵する上智大学から移管された「西北タイ歴史・文化調査団資料の神画資料」のうち、神画資料調査を実施しが、本論で掲載及び分析に用いた写真資料は、南山大学人類学博物館から借用したものである。

第4項～第8項の神画資料は、筆者が課題「ヤオ族儀礼神画の研究」(2012年～2014年度神奈川大学日本常民文化研究所・非文字資料研究センターの奨励若手研究者)において、中国湖南省永州市江華瑶族自治县、及び広西壮族自治区恭城瑶族自治县で、2回ずつのフィールド調査を実施し、鄭艶瓊及び張晶晶の協力の下、江華瑶族自治县で2組、恭城瑶族自治县で3組収集できた神画の写真資料である。



〈図4〉 湖南省永州市藍山県地図<sup>2</sup>

第10項の神画資料は、『道教文物 Cultural Artifacts of Taoism』[1999]に掲載された図録を引用したものである。

本論で分析に用いた全ての神画の写真資料は、実際の儀礼においては、ひと揃い<sup>3</sup>として使われるものである。また神画はどの地域で使用され、その所有者や、儀礼の使用実態も明らかである。分析に用いるには、少なくとも以上の条件を満たすものを本論での神画資料の選定条件としている。

以下、この11組の神画資料の所有者・保存状況・継承経路などについて詳細に紹介する。

### 第1項 湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村神画

中国湖南省永州市藍山県は、湖南省の南部に位置している。東に臨武県、南に広東省連南瑶族自治县、西に江華瑶族自治县、北に寧遠県が隣接している。匯源瑶族郷は、藍山県県城西部の標高の高い山岳地帯に位置し、湘蘭村は5つある村の中の一つである。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

この村の神画は、同村に在住する祭司の趙金付氏（ミエン人、1963年生まれ）が所有しており、19点1組となっている。ただし、張天師神画は2点あるため、合計で18種類となる。神画の名称は、以下の通りである。

元始天尊（図1-1）、靈寶天尊（図1-2）、道德天尊（図1-3）、玉皇（図1-4）、聖主（図1-5）、天府（図1-6）、地府（図1-7）、張天師（図1-8-1）、張天師（図1-8-2）、李天師（図1-9）、把壇師（図1-10）、大海番（図1-14）、十殿（図1-15）、海番張趙二郎（図1-16）、太歳<太尉><sup>4</sup>（図1-17）、三將軍（図1-18）、総壇（図1-19）、監齋大王（図1-20）、大道橋梁

趙金付氏によると、天地水陽神画<sup>5</sup>もかつては所有していたが、1998年、儀礼が行われた際に、蠟燭が天地水陽神画を入れたダンボールに倒れて火事が起こり、燃えてしまったとのことである。

趙金付氏が所有している神画は、剥離が激しく、虫に食われて穴の空いたものも見られるように保管状態も悪い。儀礼での使用状況は、神画を祭壇に掛けた後、ごく近い場所に供物台を設置し、その上に線香を立て香炉や蠟燭や灯明などを供える。さらに供物台の周囲で頻りに紙銭を燃やすため、神画の一部が破れたり燃えたりすることが度々起こるのである。

趙金付氏によれば、これらの神画は、師匠の趙子鳳（ミエン人、1928年～2000年）から継承されたものだという。趙子鳳は、元々は寧遠県に住んでおり、後に藍山県に転入した。趙子鳳は血縁からいうと趙金付氏の伯父にあたる。趙子鳳は、犁頭瑤族郷に住んでいた師匠（趙子鳳の舅）から神画を受け継いだという。この趙子鳳の師匠は、寧遠県に住んでいる師匠から継承したものであるという。この神画の継承経路をまとめると、寧遠県→犁頭瑤族郷→寧遠県→藍山県となることから、現在、趙金付氏が所持しているこの神画は、元々寧遠地域のヤオ族が持っているものであると推測できる。

この19点1組の神画のうち、元始天尊と太歳（太尉）には、銘文が記されている。そこから、神画の制作経緯や制作年代や絵師などの情報を推測することが出来、以下この2点の神画に書かれた銘文について述べる。

### ◆元始天尊神画に書かれた銘文

元始天尊神画（図1-1）に書かれた銘文は、神画の中央下部にあり、内容は以下の通りである。（■は解読不能箇所）

<銘文>

福主信士盤法有合家合 ■ 発心彩画功德三位神 ■ 供奉惟願人 癸千丁糧進万石丹青楊子蘭于  
光緒二十年八月之日大吉

<訳>

福主の信士盤法有（法名）は家族心を合わせて、三清神を描くことを発心し、子孫が増え、

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

豊作になるように祈願し祀った。絵師楊子蘭によって光緒 20 (1894) 年 8 月大吉の日に描かれた。

### ◆太歳<太尉>神画に書かれた銘文

太歳<太尉>神画 (図 1-17) に書かれた銘文は、神画の右上にあり、内容は次のようである。

#### <銘文>

今據大清天下湖南省直桂陽州藍山縣仙政鄉信仁福主盤法祿夫妻謫議發心得買神像一堂四軸言定■錢壹兩五分正以後伝與後人子孫四方相請香火不斷馬脚不停香火通行萬事大吉福有所帰丹青弟子臨武周国珍道光九年廿八日開光大吉

#### <訳>

今、大清国の天下に於いて、湖南直桂陽州藍山縣仙政郷に住む、信仁福主盤法祿 (法名) 夫妻は相談して発心し、四軸の神画を買うことができた。相談した上で錢を 1 兩 5 分払うと定めた。その後この神画は子孫たちに継承する。四方から請われて招聘され、香火は絶えることなく、馬は脚を止めず、香火は永遠に伝えられる。萬事は大吉であり、福が帰すように願う。絵師、臨武 (地名) の周国珍によって描かれ、1829 年 28 日に開光した。

この二つの銘文から、三清 (元始天尊・靈寶天尊・道德天尊) の 3 点の神画は、1894 年に描かれ、太歳<太尉>を含む 4 点の神画は、1829 年に描かれたことが分る。神画を制作する依頼者の家主の法名や神画を描く絵師の名などに関する情報も明記されている。

趙金付氏によれば、ヤオ族儀礼神画は「行師」神画と「三清兵馬」神画に区別される。「行師」神画は太尉、唐葛周三將軍、海播張趙二郎、総壇の 4 点の神画を指し、「三清兵馬」神画は三清 (元始天尊・靈寶天尊・道德天尊) を含む他の神画のことを指すという。従って、趙金付氏が所有している太歳<太尉>神画に書かれた銘文中の「神像一堂四軸」とは、太尉、唐葛周三將軍、海播張趙二郎、総壇 4 点の神画から構成される「行師」神画のことを指している。

また、太歳 (太尉) 神画に記された銘文からは、施主の盤法祿 (法名) 夫婦は湖南直桂陽州藍山縣仙政郷に住む人であり、絵師の周国珍は臨武県の人であることが分る。臨武県は、藍山県の東南部に隣接する地域である。銘文内容によると、当時藍山県に住む盤法祿は、臨武県に住む絵師の周国珍に頼み、1 兩 5 分の銀錢で三清神画を購入した。元始天尊神画に記されている銘文には、施主及び絵師の居住地が書かれていないため、地域の判別はできない。

趙金付氏によると、現在の藍山県には神画を描く絵師がいないため、氏は師匠から神画を受け継いでから、ずっと神画を描く絵師を探していたという。小学校の美術教師に依頼したことがあるが、描くことはできないと断られたこともある。後に、藍山県県城で画家に尋ねたところ、費用は高い人で 1 点 3000 元、安い人でも 1800 元かかると言われたという。1 組の神画を新たに制作する費用を捻出することができないため、古くなった神画を使い続けている。

2010 年に、趙金付氏より、神奈川大学ヤオ族文化研究所に神画の複製を委託され、筆者が複

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

製を担当した。複製に際しては、ヤオ族文化研究所の写真資料<sup>6</sup>を用い、画像を編集する Adobe ソフトウェアの PHOTOSHOP で忠実に複製を試みた。現時点では、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、太歳<太尉>、海番張趙二郎、総壇、唐葛周三將軍、王靈官神画の各 1 点ずつの複製が終わっている。

この中の王靈官神画の原画は、趙金付氏の所有ではなく、同郷の荊竹坪村寒鷄沖組に住む盤保古氏が所有するものである。趙金付氏と盤保古氏は、現地の有能な祭司であり、普段から共に儀礼を担当している。2011 年 11 月の調査の際、筆者が、趙金付氏に元帥神の神画は 2 枚 1 組でなければならぬのになぜ 1 点しか所有していないのかと尋ねたことがあった。趙金付氏はずっとこのことを気に向け、後に、盤保古氏の持っている神画の中から、王靈官神画を見つけた。この王靈官神画は、趙金付氏の所有している把壇師神画と対になるものであり、複製を行う運びとなったのである。

### 第 2 項 湖南省永州市藍山県匯源瑤族郷荊竹坪村寒鷄沖組神画

荊竹坪村も匯源瑤族郷に属する五つの村の一つである。前述した湘蘭村より、荊竹坪村はさらに山深いところにあり、標高も高い。

荊竹坪村の神画は、寒鷄沖組に居住する祭司の盤保古氏（ミエン人、1964 年生まれ）が所有しており、17 点 1 組となっている。中に、靈寶天尊神画は 2 点あるため、合計 16 種類である。神画の名称は以下の通りである。

靈寶天尊（図 2-2-1）、靈寶天尊（図 2-2-2）、道德天尊（図 2-3）、玉皇（図 2-4）、聖主（図 2-5）、天府（図 2-6）、地府（図 2-7）、張天師（図 2-8）、李天師（図 2-9）、把壇師（図 2-10）、王靈官（図 2-12）、十殿（図 2-15）、海番張趙二郎（図 2-16）、太尉（図 2-17）、三將軍（図 2-18）、総壇（図 2-19）、監齋大王（図 2-20）

これらの神画は、あまり儀礼に用いられていないため、比較的良い状態で保存されている。しかし、中には破損が非常に激しい神画が 1 点ある。それは三將軍神画であり、神画の表面は完全に破れてしまい、描かれている内容も、識別不能の状態である。

この組の神画は、趙法靈という祭司から継承されたものである。氏は、寧遠県出身で、盤保古氏の義父（妻の父親）の親戚であり、2 度婿入りをしたという。1 度目は藍山県所城鎮幼江村に、2 度目の婿入りは匯源瑤族郷にある盤保古氏の義父が住んでいた生産大隊<sup>7</sup>であった。趙法靈が亡くなった後、神画を継承できる人がいなかったため、ずっと趙氏が生前に住んでいた家屋の梁に掛けられていた。ある雨夜に、雨に濡れた神画が音をたて靈驗を現し、村の中が不穏になった。そのため盤保古氏は、趙法靈の古い家屋から神画を背負って持ち帰った。その後、村の中も平安になり、それ以来趙法靈の神画は、盤保古氏の所有となった。

湘藍村に住んでいる馮榮軍氏<sup>8</sup>によると、当時盤保古氏は、度戒儀礼を受けておらず、この

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

儀礼を通過していないため三清神画を所有する資格を得ていないといった。しかし当時の状況に鑑みるに、盤保古氏は神画を劣悪な環境の中から救い出したのであり、害が及ぼされることはないといった。<sup>9</sup>

盤保古氏が所有するこの神画には、海番張趙二郎神画(図2-16)にのみ銘文が書かれている。銘文は神画の左側、中央下部にあり、内容は以下の通りである。

<銘文>

太清国湖永州府道州寧遠県先進郷大地名紅江源小地名■僚坪立宅居住信仕福主盤法念合家眷等自發誠心命請常寧県清李功和李功貴作彩画神像四軸福所歸子孫為記皇上嘉慶十一年十月卅日開光大吉々良黄

<訳>

今大清国に於いて、湖南永州府道州寧遠県先進郷紅江源■僚坪に家を建て居住する。そこに住む信士福主盤法念(法名)及び家族全員の申し出によって、誠意を持って発心し、常寧県の絵師李功和李功貴に依頼して、四軸の神画を買うことができたことを子孫が銘記する。皇上嘉慶11(1806)年10月30日に開光して大吉である。

銘文から、海番張趙二郎神画を含む4点の神画は1806年に描かれ、10月30日に開光儀礼が行われたことが分かる。先述したように、ヤオ族儀礼神画では、太尉、海番張趙二郎、唐葛周三將軍、総壇4の神画は4点1組で「行師」神画と呼ばれる。このことから、銘文に名前の記されていない他の3点の神画は、太尉、唐葛周三將軍、総壇の神画だと推測できる。

また銘文からは、神画の依頼者の居住地が、「湖南永州府道州寧遠県先進郷紅江源■僚坪」であり、絵師は、同省の常寧県に住んでいたことが分かる。興味深いのはこの4点の神画を描く絵師が二人いる点である。絵師の名前からみると、二人は兄弟あるいは従兄弟関係にあると推測できる。他のヤオ族地域の神画の銘文にも、このような二人の絵師の名前が並び記される例がある。絵師を職業とする人は、兄弟(従兄弟)あるいは父子関係の場合が多いのではないかと考えられる。

### 第3項 湖南省永州市藍山県所城鎮団源村神画

中国湖南省永州市藍山県所城鎮は、藍山県の中南部に位置し(地図3)、北部に匯源瑤族郷が隣接する。県内に約26ヵ村があり、団源村はその中の一つである。

団源村の神画は、祭司の盤喜古氏(ミエン人、1933年~2012年)が所有していた。盤喜古氏は、生前に掛三灯儀礼は行っているものの、度戒儀礼を経ていなかったため、「行師」神画の4点しか持つことができなかった。神画の名称は以下の通りである。

海番張趙二郎(図3-16)、太尉(図3-17)、三將軍(図3-18)、総壇(図3-19)

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

匯源瑤族郷湘蘭村の趙金付氏によると、2012年に、盤喜古氏が事故で亡くなった後、この4点の神画は喜古氏の家族によって売りに出されたという。現在、神画の行方は不明となっている。

この神画は、特に破損がなく、比較的良好な状態で保存されている。盤喜古氏は、神画を儀礼に用いた後、必ず白布で丁寧に包み、赤い紐で縛り、師棍<sup>10</sup>の先端に掛け、肩に担いで神画を持って帰宅していた。

このような包み方あるいは縛り方は、現在の中国のヤオ族地域ではあまり見られない。多くの祭司は、神画を祭壇から下ろした後、数枚の神画を重ねてひと巻きにまとめ、ビニール製の紐で縛り、地面に置いておくのが普通である。しかし、ビニールの袋と紐は、神画を傷めやすく、地面に置くことにより、神画の両側の縁取りが破損することが起こりやすい。盤喜古氏の包み方は、神画を傷めないための良い方法である。このことから、喜古氏の神画を大切にしたいという気持ちが強く感じられた。

盤喜古氏所有の神画は、誰から継承されたのかは明らかにされていない。4点の神画の中に、海番張趙二郎と総壇神画の2点に銘文が記されており、そこから情報の一部を窺うことができる。

### ◆ 海番張趙二郎神画に書かれた銘文

海番張趙二郎神画(図3-16)に書かれた銘文は、神画の左側、中央寄りの下部にある。内容は以下の通りである。

<銘文>

信士行教弟子趙法興妻趙氏合家發心請匠彩画行壇功德四軸子孫永遠十方応用■常寧県丹青楊画又兄弟■皇清乾隆二十五年庚辰歲十一月二十一日

<訳>

信士行教弟子の趙法興(法名)及び妻の趙氏は家族全員と共に發心し、匠に行壇功德4軸の神画を依頼した。子孫は長く続いて絶えないように、十方で使用できるように願う。常寧県絵師の楊氏兄弟が描いた。皇清乾隆25年(1760)年辰年11月21日。

この銘文から、海番張趙二郎を含む4点の神画は、1760年に描かれたことがわかる。文末に書かれた「十一月二十一日」の日付は、神画の開光儀礼を行った日であると推測する。銘文に記された「行壇功德四軸」は、現在でいう「行師」神画のことを指していると考えられる。趙金付氏によれば、現地で神画は又の名を「功德」kongtaとも呼ぶそうである。このため、「功德」は神画を意味する言葉だといえる。また銘文から、依頼者は趙法興夫婦を主とする趙家であり、絵師は常寧県の楊姓兄弟であることが分かる。

### ◆ 総壇神画に書かれた銘文

総壇神画(図3-19)に記された銘文は、神画下部の中央にある。内容は以下の通りである。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

<銘文>

丹青請陵武周国金発売行像一堂銀錢一仟三百文 買進用保■■ 嘉慶廿年五月初五日

<訳>

陵武絵師の周国金を頼んで、銀錢 1300 文の値段で 1 組の行師神画を売ってくれた。■■を護るため購入した。嘉慶 20 (1818) 年 5 月 5 日。

銘文には依頼者の情報は詳しく書かれていないが、神画を購入するために 1300 文の金がかかったことが分かる。最後に書かれた日付は、神画の開光儀礼が行われた日だと推測する。

総壇神画の銘文には、絵師は「陵武周国金」と記されている。本節の第 1 項で述べた趙金付氏が持っている太歳<太尉> (図 1-17) 神画には、「臨武周国珍」と記されているが、盤氏が持っていた総壇神画と趙氏が持っている太歳 (太尉神画) の銘文に書かれた絵師とは同じ人物ではないかと考える。前述したように、「臨武」は湖南省にある県名であり、藍山県の東部に位置する。「陵(líng)」と「臨(lín)」の発音が近いので、「陵武」は「臨武」の同音異字であると考えられる。また「金(jīn)」と「珍(zhēn)」の発音は近いので、「周国金」は「周国珍」の同音異字の可能性もある。あるいは、「周国金」と



<図 5> 湖南省永州市江華瑶族自治県地図<sup>11</sup>

「周国珍」は、兄弟または従兄弟の可能性もあると考えられる。

分析を重ねていくと 1 組の神画を新たに制作する際に、最も位が高い神画に銘文を書く習慣があるということが明確になってきた。例外として書かない場合もある。しかし、1 組の神画であれば 2 点に銘文を書く必要はないと考えるので、盤喜古氏が持っていたこの組の「行師」神画は、恐らくもともと 1 組のものではなく、別のセットであったものが後に組み合わせられたものであったと推測する。

### 第 4 項 湖南省永州市江華瑶族自治県神画

江華瑶族自治県は、湖南省南部に位置する。東に藍山県、南に広東省連州市、西に江永県と広西壮族自治区富川瑶族自治県、北に道県に隣接する。江華瑶族自治県は、中国で最もヤオ族人口が多く、面積の広い瑶族自治県である。

この神画資料は、2013 年 11 月に、江華瑶族自治県県城で盤王祭<sup>12</sup>を調査した際、写真撮影



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

を行ったものである。その際、江華瑶族自治州民族宗教局の幹部の鄭艶瓊は、筆者が神画資料を収集していることを聞きつけ、翌日家に収蔵している神画を持参し、写真を撮らせてくれた。

現在、この神画は、儀礼には使われておらず、鄭艶瓊の自宅に保管されているという。鄭氏は、神画は県内の某村から収集されたものであるという。神画の裏面に「馮法真号」という文字が記されており、元の所有者名ではないかと推測する。神画は、17点17種類あり、名称は以下の通りである。

元始天尊(図4-1)、靈寶天尊(図4-2)、道德天尊(図4-3)、玉皇(図4-4)、聖主(図4-5)、天府(図4-6)、地府(図4-7)、張天師(図4-8)、李天師(図4-9)、海幡(図4-14)、十殿(図4-15)、海幡張趙二郎(図4-16)、太尉(図4-17)、三將軍(図4-18)、総壇(図4-19)、監齋大王(図4-20)、大道橋梁<sup>13</sup>

この組の神画は、儀礼に使用されていないため、非常に良い状態で保存されている。元始天尊神画(図4-1)の下部中央には、銘文が記されており、内容は以下の通りである。

<銘文>

今在下梅住居信仕香主馮法全妻趙氏所生男合家眷等發心彩画大堂一十式軸日後家下人丁興旺五谷豐登香門大旺百事大吉子孫永遠為記 福友所歸 丹青 王家義画 道光十六年丙申十一月十七開光吉旦

<訳>

今、下梅に居住している信仕香主の馮法全(法名)と妻の趙氏、及び息子の家族が共に、1組12軸の神画を描くことを發心した。やがて家に人が増え、五穀が豊穰であるように、香火が永遠に盛んになって行くように、全てが大吉になるように、子孫たちは永遠に銘記し、福は帰するように願う。絵師、王家義が描く。道光16(1836)年11月17日に開光儀礼を行った。吉日であった。

この組の神画は、「盤王図」という名称で、『湖南民間美術全集・民間絵画』[左漢中 1994]に収録されている。図録には、「这是一套道教功德画，於清代道光年間開光。由於在瑶族民間流傳、被習稱為〈盤王圖〉。(訳：これは1組の道教功德画である。清代・道光年間に於いて開光儀礼がおこなわれた。ヤオ族の民間で傳承されていたため、習慣的には盤王図だと稱する。)」と記されている。さらに、神画毎に説明文も加えられ、どのような神々が描かれているのかについて述べられている。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

### 第5項 湖南省永州市江華瑶族自治県両岔河郷両岔河村神画

両岔河郷両岔河村は、江華瑶族自治県の最南端に位置する（地図4）。両岔河村の神画は、祭司の李法科氏（法名）が所有している。前述したように、2013年11月に、江華瑶族自治県県城で盤王祭の調査を行った。その際、李法科氏が所有するこの神画は、江華瑶族自治県県城の中心部に建てられた盤王殿の正殿に展示されていた。

神画の中に、太尉と唐葛周三將軍神画は2点ずつあり、合計20点18種類ある。名称は以下の通りである。

元始天尊（図5-1）、靈寶天尊（図5-2）、道德天尊（図5-3）、玉皇星主（図5-4）、星主（図5-5）、天府号（図5-6）、地府号（図5-7）、張天師号（図5-8）、李天師号（図5-9）、馬元帥号（図5-11）、王靈官号（図5-12）、海幡号（図5-14）、十殿号（図5-15）、海幡全寧号（図5-16）、太尉号（図5-17-1）、太尉全寧号（図5-17-2）、三將軍（図5-18-1）、三將軍全寧号（図5-18-2）、総壇（図5-19）、庫官号（図5-21）<sup>14</sup>

この神画は、あまりよい状態で保存されていない。紙質が老朽化して脆くなり、非常に破れやすい。神画の上部と下部、及び裏に、セロハンテープを貼り破れを補修した跡が多く見られた。

李法科氏によると、神画は師匠の趙科一郎から継承されたものであるという。もともと神画の裏面に、神画の所有者である「趙科一郎」の名前が記されていたが、李法科氏は神画を継承した後、師匠の名前を塗り潰し、自分の法名を加えた。まだ消されていない部分もあり、「趙科一郎」の名が確認できることから、李氏の話と一致している。

この神画に銘文は書かれていない。李天師神画の中央部右側に、銘文を書くところが作られてはいるが、文字は書き入れられていない。

三將軍全寧号神画の裏には、「■礼応礼効二人成画」という文字が書かれている。この文字から、神画は、礼応と礼効という名前の二人の絵師によって、描かれたものだと推測できる。これ以外の記述がないため、神画の制作年代に関しては明確ではない。

### 第6項 広西壮族自治区恭城瑶族自治県蓮華鎮神画

恭城瑶族自治県は、広西壮族自治区の東北部に位置する。東に、富川瑶族自治県と湖南省江永県、南に鐘山と平楽県、西に陽朔と靈川県、北に灌陽県が隣接する。蓮華鎮は恭城瑶族自治県県城の南部に位置する。

この神画は、広西壮族自治区恭城瑶族自治県蓮華鎮に在住する祭司の黃通旺氏（ミエン人、1943年生まれ）が所有している。合計18点18種類あり、筆者が恭城瑶族自治県黃泥岡村で行われた盤王祭の調査を行った際に集めた資料である。神画の名称は以下の通りである。



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

した。後に1995年旧暦2月に、鐘山県紅花郷大宮村に住む絵師の楊呈應を大田湾にある黄法靈（法名）の家に招聘し、模写して神像17点、天橋1条を制作した。家主である黄法顕（法名）は当時人民幣■■元を要し、1995年旧暦3月の吉日に完成した。

この銘文に記された内容は、正に黄通旺氏のいう通りのものである。銘文によると、黄家が元来継承していた神画が、なぜ壊され、また、いつ、誰に依頼し、どのように新たに制作されたのかについて、明記されている。さらには神画を制作するのに必要だった金額と、開光した年月日も記されている。残念ながら、金額の部分は儀礼に使用した雄鶏の血に汚されて読み取れなかったが、2013年に筆者が現地で調査した際、張晶晶氏から黄通旺氏の神画は1500元かかったと聞き、制作に必要な金額も明確になった。

### 第7項 広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村神画

恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村は、恭城瑶族自治县の東部に位置している。2013年の調査の際、この村に神画は1組あり、祭司の趙乙昇氏（ミエン人・1965年生まれ）が所有していた。太尉神画は2点あるため、合計25点24種類の神画がある。中に、名称が分からない神画が2点（図7-22、図7-25）が含まれている。この神画（図7-22）に描かれる内容は、*Yao ceremonial paintings*中の「Kiem Tsei 禁齋」神画と相似するため、本論では「禁齋」の名称を引用する[Lemoine 1982: 142-145]。図7-25の右上には、「施食」という字が記されているため、以下この神画の名称として使用する。ここの組の神画資料は、2013年の調査で集めたものである。神画の名称は以下の通りである。

元始天尊（図7-1）、靈寶天尊（図7-2）、道德天尊（図7-3）、玉皇（図7-4）、中天星主（図7-5）、天府（図7-6）、地府（図7-7）、張天師（図7-8）、李天師（図7-9）、馬元帥（図7-11）、王靈官（図7-12）、海幡（図7-14）、十殿（図7-15）、龍樹海幡（図7-16）、太位（図7-17-1）、行象太尉（図7-17-2）、行象唐角（図7-18）、行象総壇（図7-19）、庫官（図7-21）、王姆娘娘（図7-22）、施食（図7-25）、四府功曹・左（図7-24-1）、四府功曹・右（図7-24-2）、禁齋（図7-26）、大道橋梁<sup>17</sup>

この神画は、太位と王姆娘娘神画を除き、剥離が非常に激しい。神画を入れた袋を開くと、カビの臭いが漂った。神画の表面を触ると、顔料が粉状になって落ちてくる。また虫に食われた穴、老朽化による破れなども多く見られた。

特に左側の縁が、完全に破損した状態になっている。趙乙昇氏によると、神画を濡れた地面に置いたことがあり、ビニールで包んでいなかったため、神画が水を吸い込み、左側の縁が全て駄目になってしまったという。

張晶晶氏の口述によれば、この神画は、趙家の先祖から受け継いだものではないという。趙家

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

の神画は、「批林批孔運動<sup>18</sup>」の際に、燃やされたとされる。現在持っているこの神画は、大界厄(地名)に住んでいた同姓の家から得たものであるという。大界厄の趙家の子孫たちは、嫁や婿に行き、神画を受け継ぐ人がいなかったため、趙乙昇氏の父親はこの神画を譲り受けたとされる。現在、この神画の裏には、趙法秀という法名が記されており、神画の元の所有者の法名だと推測できる。

趙乙昇氏によると、神画を家に迎えた日に、自宅で「合兵合将道場<sup>19</sup>」の儀礼が行われたという。また儀礼の中で、「掛兵」、「請接兵頭」などの小儀礼も行われた。この儀礼を通して、神画は趙乙昇氏の所有物になったということである。

調査の際に、現在現地において1組の神画を新たに制作するのに、約1万元(約178,500円)を要すると聞いた。制作費用を捻出することができないため、破損の激しい神画を使い続けているという。

この組の神画の中に、銘文が記された神画が2点ある。即ち、太位と王姆娘娘神画である。銘文は神画の裏に記されている。太位神画(図7-17-1)の裏に記される銘文は、「主制人趙文学。趙佳保描画。一九八七年十一月十八日。」となる。王姆娘娘神画(図7-22)の裏に記される銘文は、「主制人趙文光。絵画趙佳保。一九八七年十二月初十日。」となる。

「趙文学」と「趙文光」が誰なのか明確ではないが、2点の銘文から、1987年に、「趙文学」と「趙文光」は、「趙佳保」に依頼し、太位と王姆娘娘の神画を描いてもらったことが分かる。銘文の日付からみると、当時、1点の神画を描くのに、約3週間かかったことが推測できる。

張晶晶氏の口述によると、「趙佳保」は、栗田(地名)の人であり、教員の経験があり、絵が描けたとされる。当時、趙乙昇氏の上屋(同村・同族)の家は、神画を新たに制作するため、「趙佳保」に依頼したとする。その際、趙乙昇氏も太位と王姆娘娘の2点の神画を依頼した。この2点の神画は、上屋の家の所有していた神画を参考にして制作され、開光儀礼もその家の神画と共に済ませたとされる。

この2点の神画は、他の神画と比べて新しいものである。しかも布に描かれているため、破損が全くなく、比較的の良い状態で保管されている。この2点の神画を除き、他の神画は破損が非常に激しく、古いように感じられる。

### 第8項 広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷養牛坪神画

三江郷養牛坪は、恭城瑶族自治县の東部に位置している。現地の神画は、養牛坪に在住する祭司が所有するものである。2013年11月に、筆者は恭城瑶族自治县で調査した際に、張晶晶の協力の下、祭司の馮法香氏(法名)から、神画の写真データを入手した。神画に関する継承の状況等の情報は、未だ明確ではない。神画は、合計15点15種類ある。名称は以下の通りである。

元始天尊(図8-1)、靈寶天尊(図8-2)、道德天尊(図8-3)、玉皇(図8-4)、聖主(図8-5)、天府(図8-6)、地府(図8-7)、張天師(図8-8)、李天師(図8-9)、馬元帥(図8-11)、王

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

霊官 (図 8-12)、海播 (図 8-14)、十殿 (図 8-15)、太尉 (図 8-17)、庫官 (図 8-21) <sup>20</sup>

### 第9項 タイ北部ナン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村神画

この神画資料は、2014年1月2日から8日に、タイ北部ナン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村で、実施された掛灯儀礼の調査に参加した際に撮影したものである。

神画は、儀礼を担当する祭司の馮氏(ミエン人)が所有しており、合計17点17種類ある。この神画は、非常に良い状態で保存されており、目立った破損が殆どない。神画の裏に名称及び馮法官という法名が記されている。神画の名称は以下の通りである。

玉清 (図 9-1)、上清 (図 9-2)、太清 (図 9-3)、玉皇 (図 9-4)、聖主 (図 9-5)、天府 (図 9-6)、地府 (図 9-7)、張天師 (図 9-8)、李天師 (図 9-9)、趙元帥 (図 9-10)、鄧元帥 (図 9-13)、大堂海播 (図 9-14)、拾殿明王 (図 9-15)、太尉 <sup>21</sup>、四府功曹・左 (図 9-24-1)、四府功曹・右 (図 9-24-2)、大道図

神画を用いて儀礼が行われている家の祭祀場周囲の壁には、細い竹を割った板で神画を掛ける場所が作られる。神画の掛軸には紐が付けられており、儀礼の際に壁の決められた箇所には掛けられる。ヤオ族儀礼の場合は、大量の紙銭を燃やす。この地域では、神画を煙と埃によって汚さないように、一時的に神画を重ねてまとめて掛け、更にその上に布でカバーをする。また儀礼を終えると、神画を祭壇から下ろすが、その際に、所有者は非常に丁寧に神画をひとまとめに巻き、また棉紙と布で包み、布紐で縛って置く。このような丁寧な扱いから、現地の祭司が神画を非常に大切にしていることが感じられる。

神画の中に、元始天尊神画(図 9-1)のみ銘文が記されていることを確認できた。銘文は神画の裏に記されており、内容は以下の通りである。

<銘文>

馮法官誠心敬請匠人彩畫神像大小堂十七張、功德文銀二十九兩■六錢正、從今以後神像有靈有聖、保福保佑家主人、日興旺永平安、無災無難喜洋洋、人財兩旺年年進、五谷豐登滿庫倉、六畜牛馬滿山崗、福壽雙全滿家堂、師門興旺利八方、子孫千年萬代應用可也、皇上民國五年丙辰歲七月、匠人潘德源黃道日開筆大吉利也

<訳>

馮法官(法名)は、誠意を持って、匠に請い1組17点の神画を描いてもらった。費用は、29兩■6錢かかった。この後、神画は霊聖を有し、家主の幸福を護り、日々の隆盛と永遠の平安を護るようになる。災難がなく、喜びが溢れ、人口と財産は年々増え、五穀は倉に満ちる。六畜牛馬は、山に満ち、福と寿を兼ね備えて家に満ちるように護持する。師匠の一族はますます隆盛になり、子孫が千年万代にもわたって神画を使えるように護る。皇上

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

民国5(1916)年7月、絵師潘徳源、黄道吉日に開光儀礼を行い、大変縁起がいい日である。

銘文からは、家主の馮法官が、絵師の潘徳源に願い、29両■六銭の銀で17点の神画を描いてもらったことが分かる。また、神画は1916年7月の吉日に開光儀礼が行われたことも読み取れる。

### 第10項 台北世界宗教博物館所蔵神画

この神画は、台北の世界宗教博物館に保管されているものである。神画は17点17種類あり、名称は以下の通りである。

元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇大帝、聖主大帝、天府天王大帝與地府酆都大帝、陽間都祿城隍雨水府付桑大帝、一品張天師、二品李天師、総壇七十二神、太尉、太慰玄天與其大將、海番過海、雷庭郊元帥、把壇元帥、渡法海番先師、十殿冥王 [台北國立歴史博物館 1999]

元始天尊神画の裏に、銘文が記されており、内容は以下の通りである。

<銘文>

大清道光貳拾陸年十一月初十家主李法案夫婦二姓誠心請到賓州丹青匠人黄元星/昌兄弟二人彩画満堂神像一拾三幅典後祈飽和家人丁興旺人口平安十方相請南北来迎五谷香煙不斷馬脚不停資匠価銀肆兩正

<訳>

清代道光26(1846)年11月10日に、家主の李法案は妻と共に、誠意を持って賓州(広西壮族自治区南寧市賓陽県)の絵師である黄元星と黄元昌に請う。絵師兄弟二人は、1堂13点の神像を描いた。後に、家族が増えるように、平安になるように、十方から相請われて招聘され、南北から迎え、五穀が豊穰になるように、香火が永遠に伝えられるように、馬の脚は止めないように祈る。絵師に4両の銀を払った。

洪莫愁は、「元始天尊神画裏の銘文によると、清道光26年11月10日に、李法案は4両の銀を以て賓州の絵師に頼み、神画を13点描いてもらったということが分かる。また文物商人が付けた神画の資料によれば、李法案は、先に4両の銀で13点の神画を描くように頼んだが、後に、4点の神画を追加したという。従って合わせて17点の神画を注文した。」という。また、「神画毎に、裏面に李法案の法名が書かれている。その中の5点は破損したため、李家の子孫である李法和は、神画を新たに表装した後に、自らの法名を裏面に記した。」という[洪莫愁 1999: 34-40]。

### 第11項 南山大学人類学博物館所蔵西北タイ神画

この神画は、白鳥芳郎教授を団長とする上智大学西北タイ歴史文化調査団が、1971年10月中旬より翌72年2月中旬まで、西北タイのチェンライ県で、第二次海外学術調査を実施した際に、チェンライ県にあるバン（盤）・フェイタンというミエンの家から、完全なセットで購入したものだと言われる[白鳥 1985:504]。2000年に、上智大学西北タイ歴史文化調査団が収集した全ての資料が、南山大学人類学博物館に移管され[後藤 2004:11-14]、現在、これらの神画の一部は常設展示室に展示されている。南山大学人類学博物館は、神画に描かれた内容などに関する説明を作成していない。

2014年7月8日に、筆者は南山大学人類学博物館でこのセットの神画資料について調査を実施した。この18点の神画の裏面には、神画所有者の法名及び、それぞれの神画の名称が記されており、また「玉清」神画の裏面にはこのセットの神画の作製された年代及び地域、そしてその神画を祀った所有者の家系姓名も明記されている。以下、神画の裏に記された神画の名称となる。

玉清(図11-1)、上清(図11-2)、太清(図11-3)、玉皇(図11-4)、聖旨(図11-5)、天府(図11-6)、池府(図11-7)、張天師(図11-8)、李天師(図11-9)、趙元帥(図11-10)、鄧元帥(図11-13)、大海翻(図11-14)、拾殿(図11-15)、小海翻(図11-16)、大位(図11-17)、壇(図11-19)、靈皇(図11-28)、大度橋

玉清神画(図11-1)の裏に記された銘文の内容は以下の通りである。

<銘文>

法財趙金財合家諦議誠心敬請彩画錦衣恭奉祖宗保佑家堂人丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉  
錢財牛馬滿山莊更招外処田壕宅兒孫為宰上朝堂

皇上光緒三十三年歲次丙午■■■■画■■■月十二日開光吉利榮華貴請広西省思恩府武侯県  
永寧郷大漁村潘■■画大小堂十張謝師紅銀貳拾兩六錢正匠保主人増福寿福祿齊天子連孫

<訳>

法財、俗名趙金財は一家で協議した上、真心を持ち、謹んで錦衣<sup>22</sup>を彩画することを願い、祖先を恭しく奉ずる。家の人々を保つように、六畜が群になるように、金と銀が庫に満ちるように、穀物は倉に満ちるように、牛馬は山莊に一杯になるように願う。さらに外から田んぼや住宅を招き、子孫は高官になって朝廷に出るように願う。

皇上光緒33年丙午年<sup>23</sup>■■■■画■■■月12日に、開光し、縁起がよく、榮華をきわめる。広西省思恩府武侯県永寧郷大漁村の潘■■さんに願い、大小神画を十枚描いてもらった。絵師に感謝する紅銀<sup>24</sup>はちょうど20両6錢である。家の主人は、幸福になるように、長寿になるように、福祿が天と同じ高さになるように多くなり、子孫が繁栄になるように保つ。



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

この銘文を解読すると、この18点中10点の神画は、家主の趙金財（法名：法財）が、光緒33（1907）年に絵師に依頼して描かせたものであり、某月の12日に神画の開光儀礼が行われたことも記されている。絵師は、広西省思恩府武侯県永寧郷大漁村に住む潘氏であり、神画を制作するには、20両6銭がかかったことが分かる。また家主は、先祖に対して、家を護ってくれるよう、子孫が増えるように、六畜が群れなすように、金と銀が庫に満ちるように、穀物が豊穰になるように、牛馬が山に満ちるように、子孫が朝廷の高官になれるように、と祈願することも記されている。他の8点の神画に関する情報は、銘文に記されていないため判明しない。

### 第2節 読み取りの対象と神画内容異同表について

前節で異なるミエン地域から収集した11組の神画資料について紹介した。神画の名称及び神画に描かれている内容によって、全ての神画が27種類に分類でき、即ち、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府、張天師、李天師、把壇師、馬元帥、王靈官、鄧元帥、大海播、十殿、海播張趙二郎、太尉、三將軍、総壇、監齋大王、庫官、王姥、大道橋梁、四府功曹、施食、禁齋、太慰玄天與其実大将、家先像神画である。湖南省永州市藍山県所城鎮団源村の神画を除き、他の10組の神画の中に、元始天尊、靈寶天尊、道德天尊、玉皇、聖主、四府・張天師、李天師、大海播、十殿、太尉、海播張趙二郎の12種類と、元帥神が描かれる神画の2種類<sup>25</sup>が殆ど入っていることが確認できる。本論で取り上げた神画資料ばかりでなく、また大阪の国立民族学博物館に収蔵されるタイ北部のミエンが持っていたセットとなる儀礼神画<sup>26</sup>、及び *Yao ceremonial paintings* [Lemoine 1982 : 46-52]、*Thanh Thờ Các dân tộc thiểu số phía bắc Việt Nam*[Quý Đông Sơn Ngày Nay 2006 : 117-132]、*The Yao: The Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand*[Jess G. Pourret 2002 : 220-229]などの図録に掲載されたセットとなるミエン儀礼神画からもこれらの種類の神画を確認することができる。よって、これらの種類の神画は、異なるミエン地域が共通して持っている神画であると考えられる。また、この14種類の神画の他に、三將軍、総壇、監齋大王の3種類は、湖南省永州市藍山県・湖南省永州市江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエン地域において必ず所持されている神画である。以上述べたこれらの神画は、本論での読み取り及び分析の主なる対象となるものである。

神画に描かれている内容に関して、Lemoine は *Yao ceremonial paintings* の中で神々及び脇侍の様子、姿勢、服装の様式・色・模様、持物・冠物等について述べている。Lemoine の読み取りに基づき、本論では神画に描かれる内容を更に細分化して項目に分けた。設定した項目は神画に描かれる主神と脇侍に分け、それぞれの配置、顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色、衣服の様式・色・模様等とし、前述した異なるミエン地域の神画資料を11組19種類にわたって項目ごとに表で示した（別冊・表1～表19）。これらの表を通して神画に描かれる内容をミクロな視点から情報を読み取り、異なるミエン地域に用いられている同種の神画に描かれている内容の異同を明らかにしたい。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

以下、各表と対照しながら、神画に描かれている内容を詳細に読み取る。なお、神画に描かれている物事及び人物の位置関係を説明する際に、神画に描かれている主神を中心に、主神から見て上・下・左・右・前・後の方向を表す語を用いる。

### 第3節 異なる過山系ヤオ族(ミエン)地域の同種の神画に描かれる内容の異同

#### 第1項 元始天尊神画に描かれる内容について（別冊・表1）

元始天尊神画に描かれている内容を読み取る前に、まず本論で取り扱っている元始天尊及び靈寶天尊神画の写真資料について一言を加えたい。筆者は現地で神画調査を実施する際に、広西壮族自治区恭城瑶族自治县で行われる儀礼の中で、現地の祭司が、元始天尊神画と靈寶天尊神画を逆に使用していることを確認した。これは神画を祭壇に掛ける際に単に左右の掛け位置を逆にしたという単純な間違いではなく、彼らの認識では両神を逆転して考えている。本論では、その地域の信仰を尊重するため、図6-1・図7-1・図8-1に「元始天尊」、図6-2・図7-2・図8-2に「靈寶天尊」の名称を付けた。しかし、元始天尊と靈寶天尊は同一神ではなく、特徴も異なる。故に本論では、同一神として取り扱うことができない。よって、元始天尊神画の内容を読み解く際に、図6-2・図7-2・図8-2を加えて比較分析を行う。同様に、靈寶天尊神画を読み解く際に、図6-1・図7-1・図8-1を用いる。以下、まず元始天尊に描かれている内容を読み解く。

『道教事典』は、「天尊、道教における最も尊貴な天神の称。三清の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇といわれる玉皇大天尊、太一でいう太一救苦天尊などがこれである」という[野口ほか(編)1994:429]。また、「元始天尊、隋唐道教の最高神の名」とされる[野口ほか(編)1994:128]。

元始天尊神画の全体的な構図としては、中央部に大きく元始天尊像が描かれ、下部の両側に各1人の脇侍が配される。また、図1-1の上部には、元始天尊の号「玉清」が記されている。元始天尊は玉清境を支配する主神であるため、この玉清とは、間違いなく元始天尊を指している。

元始天尊は、御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を冠る。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所に、やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。龍袍を着、袍には龍と瑞雲の模様が見える。襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。襟の合わせたところに、神獣模様のものが見え、帯に付ける魔除けの装身具であると考えられる。

元始天尊の両腕の姿勢に関しては、左腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結ぶ。右腕は内側に約60度曲げ、右手は上を向いて手訣を結ぶ姿勢をとる。だが、図1-1の元始天尊の両腕は内側に約60度曲げ、両手は上向きで手訣を結ぶ姿勢をとる。図5-1・図8-2は、左腕は内側に約90度曲げ、左手は上を向き、手に酒杯を持つ。右腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌にしながら手訣を結ぶ姿勢をとる。また、持物に関して、図9-1と図11-1は、元始天尊は右手に酒杯を持つと描かれている。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

元始天尊が着ている龍袍の色に関しては、主に黒色で描かれているが、他には赤色と深緑などの色も見られる。図 1-1 の元始天尊は赤色の龍袍を着、図 7-1 は黄緑色の龍袍を着、図 8-1 は灰色の龍袍を着る。

元始天尊の御座は、龍座と鳳座がある。図 1-1 の元始天尊の肩の両側には、口に宝珠を咥えている白い鳳凰の首が見える。これは元始天尊の御座の背もたれにつけられた飾り物であると考えられる。また、図 9-1、図 10-1、図 11-1 には龍首の飾り物が見える。

元始天尊の下部の両側に、光背を配した中央に向いている脇侍がそれぞれ立っている。脇侍は男女があり、必ずしも男女を揃えて描かれているわけではなく、二人とも男の脇侍、あるいは二人とも女の脇侍であることも見られる。女の脇侍なら、雲帔という肩かけをし、裙を穿く、両手は胸の前に出し、供物を盛る円盆を持つ。男の脇侍なら、文官と武官の区別があるが、文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つ。武官は、鎧あるいは武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を冠り、手に鞭や錘などの法具を持つ。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図 9-1、図 10-1、図 11-1 には、さらに華蓋が加えられている。図 11-1 の華蓋の両側に、更に鳳凰が描かれている。

元始天尊神画を含む三清神画の読み取りについて、神画研究第一人者である Lemoine は、次のように述べている。

三清はいつも彼らのそれぞれの位置にある。注目するのは、二人の玉の従者は元始の銘板を囲むことである。また、道德は一人の男性と一人の女性を持っており、靈寶は二人の男性を持っている（一人は文官、一人は軍人）。縁起の良い言葉は、このシリーズでは、各画像の上部に表示される。左から右に読むと、五福（道德の上部）、福と寿（元始の上部）、康と寧（靈寶の上部）である。[Lemoine 1982:53]

文中の元始天尊・靈寶天尊・道德天尊神画は一柱の主神と二人の脇侍で構成されているという構図は、筆者が収集した三清神画の構図と同じである。但し、神画の上部に表示された文字という点は、筆者が収集した神画の剥離が激しいため、元来上部には何が書かれていたかについてほとんど識別不能である。複数の元始天尊神画から文字が確認できたのは1点（図 1-1）あり、「玉清」という元始天尊の号が書かれているが、縁起の良い言葉は書かれてなかった。

また、元始天尊の持物に関して、Lemoine は、次のように述べている。

元始は、一般に一つの手には不死の丸薬を持ち、もう一つの手は手訣の仕草をする。場合によって不死の丸薬（老君の秘薬）は小さい器に入っている。多くの場合、手に何も持っていないように見えるが、薬物が手のひらの中に隠されているか、あるいは画家が追加するのを忘れたからである。[Lemoine 1982:57]

文中の「不死の丸薬」は筆者の収集した複数の元始天尊神画には描かれておらず、手に何も持

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

っていないか、たとえ持っていたとしても多くは酒杯を持つ。「丸薬」と手に何も持っていないという点について、『道教大辞典』では次のような記述もある。

元始天尊は、一般に道教三清殿の中央に奉じられ、頭部に円形の光が覆い、手に丹丸（丸形の練薬）を持ち、あるいは左手は虚しく捻り、右手は虚しく捧げる姿勢となす。この姿勢は、「天地未形、万物未生<sup>27</sup>」時の「無極<sup>28</sup>」を表している。[関ほか(編)1995:169]。

ここでは、まず、元始天尊の手に持っている薬は不死かどうか問わず、丸形の練薬が同様である。それから、Lemoineの見解と『道教大辞典』の記述とは、なぜ元始天尊の手に何も持っていないかについてかなり相違している。Lemoineの「不死の丸薬が手のひらの中に隠されているか、あるいは画家が描くのを忘れたからである」という解釈は適切ではない。手に物を持っていないこと自体が特別な意味を持っており、『道教大辞典』に記されたように、「天地未形、万物未生」時の「無極」を表しており、Lemoineの見解が間違っていると考える。

### 第2項 靈寶天尊神画に描かれる内容について（別冊・表2）

『道教事典』によれば、「靈寶天尊、三清境（三天）の一つの上清境（禹余天）の主神」という[野口ほか(編)1994:612]。

靈寶天尊神画全体的な構図としては、靈寶天尊像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。図1-2、図2-2-1、図2-2-2の上部には、文字が記されており、図1-2は「左禄清」と記されているが、図2-2-1と図2-2-2は剥離しているため、読み取れなかった。図1-2には、「左禄清」とあるものと「上清」とはつきり書かれてはいないが、絵師は靈寶天尊の号を示したかったのではと考える。

靈寶天尊は、左腕は内側に約120度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結び、蓮華を持っている。右腕は内側に約60度曲げ、右手は上向きで蓮華の柄を支え、御座に座る姿である。だが、図1-2の靈寶天尊は団扇を持っており、図6-1・図7-1・図8-1の元始天尊は左手に如意を持っている。

靈寶天尊の上半身と頭部に円環と炎状の光背を配する。髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を冠る。鼻の下・耳のした・顎先の三箇所、やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て黒である。緑色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。襟の合わせたところに、神獣模様の装身具が見える。その下に綬帯を垂らして飾る。

靈寶天尊が着ている龍袍の色に関しては、主に緑色及び深緑色で描かれているが、図4-2のように紺色の龍袍を着ると描かれるのも見られる。

靈寶天尊の御座は、龍座が見える。図1-2、図10-2、図11-2に描かれている靈寶天尊の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

靈寶天尊の下部の左右に、光背を配した男女脇侍がそれぞれ立っている。神画に向かって脇侍

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

は左側に向いている。靈寶天尊神画に描かれている男女の脇侍は、元始天尊神画と同様の装束をしている。また、図 5-2、図 9-2、図 10-2 の下部に描かれている男脇侍の後ろには龍が見える。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図 2-2-1、図 2-2-2、図 9-2、図 10-2、図 11-2 には、さらに華蓋が加えられている。図 11-1 の華蓋の両側に、更に鳳凰が描かれている。

靈寶天尊の持物について、Lemoine は次のように述べている。

靈寶天尊の左手に常に如意タイプの仏教の権杖を持っていると見える。右手も権杖を支えるか、あるいは手訣の仕草をする。18 世紀後期及び 19 世紀初頭、中国南部の画家は如意権杖に精通していない可能性ある。そして彼らの作品では、如意権杖が長期間にわたって蓮華になってきた。[Lemoine 1982 : 60]

本論が用いた複数の靈寶天尊の神画には、靈寶天尊は手に如意ではなく、蓮華を持って描かれている。蓮華が、Lemoine が述べるように如意から発展したかどうか、またどのような意味を持っているのかは、未だに判明していない。靈寶天尊は道教の神として、手に太極図あるいは如意を持つ[関ほか(編) 1995 : 595]が、しかしミエン儀礼神画に描かれる場合は、蓮華に変化している。ミエンは道教の神々を自分の中に取り入れ、さらに自己の独自の解釈を加えたと考えられる。靈寶天尊が蓮華を持って描かれることはその一例であろう。

靈寶天尊と元始天尊(本節第 1 項)神画を読み取ると、二神の基本的な特徴は非常に似ているという点がある。それについて、Lemoine が次のように指摘している。

彼らの顔は非常に似ているので、初めて神画を見ると、元始と靈寶を区別することが困難である。[Lemoine 1982 : 61]

前項と本項で元始天尊と靈寶天尊神画に描かれている内容の分析によって、筆者は、一目でこの二神を区別できる方法は、神の着ている衣服の色と、神画の下部に描かれている脇侍の向きと、銘文の有無を確認することである。具体的にいうと、黒色の龍袍を着ているのは元始天尊であり、緑系の色の龍袍を着ているのは靈寶天尊である。脇侍が中央に向いているのは、元始天尊神画であり、脇侍が向かって左側に向いているのは、靈寶天尊神画である。銘文が書かれているのは元始天尊神画であり、書かれていないのは靈寶天尊神画である。ただし、この方法は必ず全てに通用するというわけではない。広西恭城瑶族自治县のように逆用される状況もあるので、元始天尊神画と靈寶天尊神画を区別する際に、現地の状況と神画の儀礼における使用習慣をよく調べなければならない。

### 第 3 項 道德天尊神画に描かれる内容について (別冊・表 3)

『道教事典』によれば、「道德天尊、中国における道教の神。三清の天界のうち、太清天に住

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

まって、玉清天に住まう元始天尊、上清天に住まう靈寶天尊とともに、道教三尊、あるいは三宝と称する」という[野口ほか(編) 1994 : 461]。

道德天尊神画の全体的な構図としては、神画の中央部に道德天尊像が大きく描かれ、下部両側に二人の従者が描かれている。図 1-3 と図 2-3 の上部には、文字が書かれているが、剥離したため、どのような文字が書かれているのかについて不明である。

道德天尊は御座に座る姿勢であり、右腕は内側に約 120 度曲げ、手首を曲げて立掌しながら手訣を結び、団扇を持っている。左腕は内側に約 60 度曲げ、手は上向きで手訣を組み団扇の柄を支える。

道德天尊の上半身と頭部に円環と炎状の光背を配し、髪の毛は頭頂で結び、その上に金冠を冠る。鼻の下・耳のした・顎先の三箇所、やや長い鬚を生やす。眉・眼・髪と鬚の色は全て白である。藍色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図 2-3、図 10-3、図 11-3 に描かれている道德天尊の龍袍は紺色であり、図 4-3 と図 6-3 は緑色であると見える。龍袍の襟の合わせたところに、神獣模様の装身具が見え、その下に綬帯を垂らして飾られている。

道德天尊の御座は、龍座が見える。図 1-3、図 10-3、図 11-3 に描かれている道德天尊の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

神画下部の両側に、光背を配す男女の脇侍がそれぞれ立っている。二人とも向かって右を向いているが、図 4-3 に描かれている脇侍は向かって左を向いている。道德天尊神画に描かれている男女の脇侍は、元始天尊神画及び靈寶天尊神画と同様の装束をしている。

注目すべきは、道德天尊神画(図 5-3、図 6-3、図 9-3、図 10-3)に描かれている男脇侍の後ろには虎が見え、1-3 の男脇侍の左肩の上に龍が見える点である。また靈寶天尊神画(図 5-2、図 9-2、図 10-2)に描かれる脇侍の後ろにも龍が見える。靈寶天尊と道德天尊神画を合わせてこの点について、Lemoine は *Yao ceremonial paintings* の中で、「一匹の虎は、道德の従者たちの間にいる。それとバランスを取って、靈寶の従者たちの間に一匹の龍がいる。虎と龍は、それぞれに西方と東方を象徴する」[Lemoine 1982 : 61]と述べている。虎と龍はそれぞれに東方と西方を象徴するという見解について、筆者は理にかなっていないと考える。なぜならば、三清神画を祭壇に掛ける際に、元始天尊神画は中央に、元始天尊から見て左側に靈寶天尊神画、右側に道德天尊神画を配置する。左の方位は東方と対応し、守護する神獣は青竜である。右の方位は西方と対応し、守護する神獣は白虎である。左側に掛けられる靈寶天尊に描かれている龍と、右側に掛けられる道德天尊に描かれている虎を見ると、自然に青龍と白虎を連想するが、ミエンの人々がどのように理解して、神画を描かせたかどうかは分からない。

ミエンが東西南北と虎・龍等との関連を理解しているかどうかについて疑問がある。筆者の見解では、脇侍の後ろに描かれている虎と龍はその脇侍は誰であるかを識別するシンボルである。なぜならば、趙金付氏が所有している書表書(伝度用)というジャンルの儀礼文献の中に、『■ ■二十七年彩画三清大開光伝度陽陰加職補充用』<sup>29</sup> という題名のあるものがある。中には、三清及び三清の脇侍たちについて、次のような記述がある。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

<前略>

又開出三清鬼名元始天尊  
周趙元年正月十五日辰時生姓胡积迦仏出世  
元始天尊脚下南北二斗星君  
靈寶天尊周趙二年四月二十四日辰時出生姓沈  
靈寶天尊脚下龍元帥献花玉女七月二十五日午時  
道德天尊姓李脚下虎元帥献花祐女

<後略>

<訳>

また、三清の鬼が出る。名は元始天尊である。  
元始天尊は周趙元年1月15日辰時に生まれ、胡姓である。积迦仏の生まれ変わりである。  
元始天尊の脚下に南斗星君と北斗星君を並べている。  
靈寶天尊の脚下に龍元帥と献花玉女を並べている。7月25日午時の生まれである。  
道德天尊は李姓である。脚下に虎元帥と献花祐<sup>30</sup>女を並べている。

ここには、三清神の生年月日と苗字、及び脇侍の名称が記されている。注目したいのは、三清神の脇侍である。元始天尊の脇侍は南斗星君と北斗星君であり、靈寶天尊の脇侍は龍元帥と献花玉女であり、道德天尊の脇侍は虎元帥と献花祐女である。この二人ずつの脇侍は恐らく三清神画に描かれている脇侍であろう。特に神画から読み取れた情報によると、道德天尊と靈寶天尊神画に描かれている男の武将装束の脇侍の後ろに虎と龍が描かれており、女の脇侍は手に花を持っている。このように神画に描かれていることは『■■二十七年彩画三清大開光伝度陽陰加職補充用』に記されている内容と一致している。故に、靈寶天尊神画の下部に描かれている脇侍は龍元帥と献花玉女であり、道德天尊神画の下部に描かれている脇侍は虎元帥・献花玉女であり、龍と虎は二人の將軍のシンボルであると考えられる。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図9-3、図10-3、図11-3には、さらに華蓋が加えられている。図11-3の華蓋の両側に、更に鳳凰が描かれている。

元始天尊と靈寶天尊と比べ、道德天尊は非常に識別しやすい神である。なぜならば、道德天尊は髪の毛が白い老人像だからである。また彼の手に持っている団扇も識別するシンボルの一つである。この団扇について、Lemoineは、*Yao ceremonial paintings*の中で、「靈寶の左手に持つ権杖とのバランスを取るため、道德の右手に日と月の紋様の団扇を持っている」という [Lemoine 1982: 60]。しかし、筆者の収集した複数の道德天尊神画には、Lemoineが述べた日月紋様の団扇はなかった。また、吉野晃氏から得た語であるが、「タイのミエンの村で酒を飲んで赤ら顔になると、『道德天尊のようだ』と戯れ言を言い合っていたものである。顔が薄紅いことも道德天尊の特徴の一つである」という。本論で取り扱う道德天尊の顔色を見ると、タイ北部から集めてきた図9-3と図11-3に描かれている道德天尊は確かに元始天尊と靈寶天尊の顔色

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

より赤く見える。それ以外の地位域の道德天尊神画はこういう特徴に関してあまり目立たない。

### 第4項 玉皇神画に描かれる内容について (別冊・表4)

『道教事典』によれば、「玉皇大帝、宋代以降の中国民間諸神中の最高神。玉皇・昊天玉皇・天帝などともいわれる」という[野口ほか(編) 1994: 105]。

玉皇神画全体的な構図としては、玉皇像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。図1-4と図6-4の上部には、文字が記されており、図6-4は「玉皇左」と記されているが、図1-4は剥離しているため、読み取れなかった。

玉皇は御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに瑞雲が描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠り、冕の両側に旒<sup>31</sup>が描かれている。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。玉皇は黄色の龍袍を着、袍の模様は龍と瑞雲である。但し、図2-4に描かれている玉皇の龍袍は黒色であり、図5-4は赤色である。また図1-4の龍袍には、瑞雲しか描かれていない。袍の襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。図11-4は、襟の合わせたところに、さらに帯に付ける神獣模様の装身具が描かれており、神獣の額に「王」という字が書かれている。

玉皇の両腕は、内側に約90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持つと描かれている。図6-4に描かれている玉皇の手には圭を持っていない。また図1-4、図2-4、図6-4、図9-4、図11-4の玉皇の両手は袖の中に隠れて見えないが、図4-4、図5-4、図7-4、図8-4、図10-4の玉皇の両手は袖から出している。

玉皇の御座は、龍座が見える。図9-4、図10-4、図11-4に描かれている玉皇の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

玉皇の下部の左右に、光背を配した脇侍がそれぞれ立っている。図3-4、図4-4、図5-4、図6-4、図7-4、図8-4の脇侍は、二人とも中央に向いているが、図1-4、図9-4、図10-4、図11-4の脇侍は向かって左に向いている。脇侍は男が圧倒的に多いが、図6-4に描かれている二人の脇侍のみ女である。女の脇侍は冠を冠り、袍を着、裙を穿き、両手胸の前で合わせて圭を持ち、女官の装束となっている。男の脇侍は、文官と武官の区別がある。文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つが、図4-4と図4-5に描かれ脇侍の手には書物のようなものを持っている。武官は、武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を冠り、手に鎗などの法具を持つ。また図6-4の二人の脇侍の間の方には、牌位のようなものが描かれているが、そこに文字は記されていない。また図8-4の脇侍の間の方には、赤い帽子を冠っている半裸の小さい人が描かれており、この小人は左腕を頭の上に上げる姿勢となる。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図2-4、図9-4、図10-4、図11-4には、さらに華蓋が加えられている。図11-1の華蓋の両側に、さらに鳳凰が描かれている。

神画に描かれている玉皇について、Lemoineは、次のように述べている。



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

ヤオ族の絵の中で、中国の彫刻と絵のように、玉皇は天蓋付きの王座に座り、皇帝の龍袍を着ると示されている。彼の頭の上に、上に板を載せた皇帝風の冕を冠り、真珠の旒は前部及び後部に垂れ下がっている。玉皇の手を交差して圭を持っている。[Lemoine 1982 : 65]

筆者が収集した複数の玉皇神画に描かれている玉皇の姿勢・服装・冠物などは、Lemoine が述べたこととほぼ一致する。

### 第5項 聖主神画に描かれる内容について (別冊・表5)

聖主神画全体的な構図としては、聖主像は中央部に大きく描かれ、下部の両側に二人の脇侍が描かれる。図2-5と図6-5の上部には、文字が記されており、図6-5は「聖主右」と記されているが、図2-5は剥離しているため、読み取れなかった。

聖主は御座に座る姿勢で描かれている。上半身及び頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに瑞雲が描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠り、冕の両側に旒が描かれている。鼻の下・耳の下・顎先の3箇所やや長い髭を生やす。眉・眼・髪と髭の色は全て黒である。聖主は黒色の龍袍を着、袍の様子は龍と瑞雲である。但し、図1-5、図5-5、図7-5に描かれている聖主の龍袍は黄色であり、図4-5、図6-5、図8-5は赤色である。また図1-5の袍には、梅花の様子が描かれているが、2-5の袍には、瑞雲しか描かれていない。袍の襟は腰のところで合わせ、下に綬帯を垂らして飾る。図11-5は、襟の合わせたところに、さらに帯に付ける神兽模様の装身具が描かれており、神兽の額に「王」という字が書かれている。

聖主の両腕は、内側に約90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持つと描かれている。図2-5、図9-5の聖主の両手は袖の中に隠れて見えないが、他の神画に描かれている聖主の両手は袖から出している。

聖主の御座は、龍座が見える。図10-5、図11-5に描かれている聖主の肩の両側には、御座の背もたれにつけられた龍首の飾り物が見える。

聖主の下部の左右に、光背を配した脇侍がそれぞれ立っているが、図1-5は他の聖主神画と異なり、下部の左右にそれぞれ二人の脇侍が描かれている。図1-5、図4-5、図5-5、図6-5、図7-5、図8-5の脇侍は、中央に向いているが、図2-5、図9-5、図10-5、図11-5の脇侍は右に向いている。脇侍は全て男性であり、文官と武官の区別がある。文官は袍を着、両手を胸の前に合わせ、手に圭を持つが、図1-5に描かれている文官装束の脇侍は花や枝等の供物を持ち、図7-5の脇侍は書物のようなものを持っている。武官は、鎧あるいは武将の袍を着、頭に兜あるいは武官の冠を冠り、手に剣などの法具を持つ。また図8-5の脇侍の間の下方には、赤い帽子を冠っている半裸の小さい人が描かれており、この小人は左腕を頭の上に上げる姿勢となる。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図9-5、図10-5、図11-5には、さらに華蓋が加えられている。図11-5の華蓋の両側に、さらに鳳凰が描かれている。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

以上、複数の異なるミエン地域の玉皇神画と聖主神画に描かれている内容の異同について詳細に見てきたが、この二神は前述した元始天尊と靈寶天尊のように、基本的な特徴が非常に近いということが分かる。一目で区別できる方法は、袍の色と脇侍の方向であると考えられる。黄色の龍袍を着ているのは玉皇、黒色の龍袍を着ているのは聖主である。また脇侍が向かって左に向いているのは、玉皇神画であり、脇侍が向かって右側に向いているのは、聖主神画である。

玉皇と聖主の特徴について、Lemoine は、次のように述べている。

両方の特徴と身振りは通常同じである。彼らの間の唯一の違いは、彼らの衣の色である。

玉皇は黄色で、聖主は緑色である。[Lemoine 1982 : 65]

しかし、*Yao ceremonial paintings* に載っている聖主神画の写真<sup>32</sup> から見ると、聖主の衣の色は黒色であり、Lemoine が述べた緑色ではなかった。この点について、Lemoine が読み間違っている可能性があると考えられる。

### 第6項 四府神画に描かれる内容について (別冊・表6, 表7)

ミエン儀礼神画の中で、四府が描かれている対となる2点の神画がある。1点の神画にはそれぞれ二神が描かれ、合わせて天府・地府・水府・陽間の四神が描かれる。*Yao ceremonial paintings* によると、タイではこの種類の神画において、天府と地府を1点に、陽間と水府を1点にまとめて描かれるとされる[Lemoine 1982]。しかし、湖南省永州市藍山県・同省の江華瑶族自治县・广西壮族自治区恭城瑶族自治县で、この2点の神画はそれぞれ「天府」と「地府」と呼ばれるため、天府と地府の二神が1点の神画にまとめて描かれていない可能性があると考えられる。また、神画に描かれる四神の服飾・姿勢・冠物・持物は非常に近似するため、具体的にどの神が天府・地府・水府・陽間であるかははっきりと区分できないものである。よって、本論では、この種の神画に対して、「四府」神画という語を用いる。対となる2点の神画に描かれる内容を読み取る際に、「四府(左)」と「四府(右)」の語を用いる。神画に描かれている神々の向き方向から区別すると、向かって右を向いているのは「四府(左)」で、向かって左を向いているのは「四府(右)」である。

#### 6-1. 「四府(右)」に描かれる内容について(表6)

四府(右)神画の全体的な構図としては、主神の二神がそれぞれに神画の上部と下部に描かれ、主神の後ろには脇侍が配される。図7-6の上部には、「天府右」と書かれている。また図1-6と図2-6の上部は剥離したため、文字が書かれているかどうかは確認不能である。

まず上部に描かれている主神を見よう。主神は、向かって左に向いており、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠っており、冕の両側に旒が垂れ下がり、描かれた旒の本数は1本から3本まであり、完全に一致する

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

ものがない。また図 5-6、図 7-6、図 8-6、図 9-6、図 11-6 の冕の両側には旒が描かれていない。

主神の眉・眼・髪と髭の色は全て黒色であるが、1-6 の上部に描かれている主神の髪と髭は赤色である。主神は主に黄色の帝王式の袍を着るが、また赤色・藍色のも見られる。図 4-6、図 9-6、図 11-6 は赤色、図 5-6 と図 6-6 は藍色である。袍は主に瑞雲や花などの模様が描かれるが、また図 6-6 のように龍の模様が描かれているのも見られる。

主神の両腕は、内側に 90 度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持っている。しかし、図 9-6 と図 11-6 に描かれている主神の姿勢は異なっており、右手は顔の前に上げて手訣を結び、左手は袖に隠しており、両手には何も持っていない。

主神の後ろに、旗を掲げる脇侍（一人）がいる。図 4-6、図 5-6、図 6-6 は、主神の後ろの両側に各一人の脇侍が描かれており、向かって右側の脇侍は旗を掲げ、向かって左側の脇侍は文書のようなものを持っている。脇侍は全て男性で、文官あるいは武官の装束をしている。但し、2-6 に描かれている旗を掲げる脇侍はどちらでもなかった。彼は西遊記中の哪吒のように、頭の上に二つに結び分けた髻を結び、子供の装束である。脇侍らは主神と同じ向き方向で、向かって左へ向いた立ち姿勢である。以上は神画上部に描かれている主神と脇侍らである。

次に、神画下部に描かれている主神と脇侍を見よう。神画下部に描かれる主神は、上部の主神の姿勢や装束などと比べてほぼ同じである。向かって主神は左へ向き、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠っている。

主神の眉・眼・髪と髭の色は全て黒色である。主に赤色の帝王式の袍を着るが、また紺色・緑色・藍色の袍も見られる。図 4-6 は紺色、図 6-6、図 7-6、図 8-6 は藍色、図 2-6 と図 11-6 は緑色である。神画下部に描かれる主神は、上部に描かれる主神の両腕の姿勢と同様で、手に圭を持っている。

神画下部に描かれる主神の周囲に一般的には脇侍が描かれませんが、図 5-6、図 7-6、図 8-6 には旗を掲げる鬼形の脇侍が見られる。鬼の脇侍は帽子を冠らず、袴を穿き、腰巻を巻く姿となる。また図 5-6 の鬼は服も着ておらず、半裸の姿で描かれている。

神画の背景として、一般的に瑞雲が描かれるが、四府(右)の場合は、神画の下部の左側あるいは右側に、官府の方隅が見られる。そこには、テーブルが描かれ、上に筆置きや紙などのものが置かれ、テーブルの後ろに官員と役人模様の人が描かれている。さらに、図 4-6、図 6-6、図 9-6、図 10-6、図 11-6 には、テーブルの手前側に、箱とひとつながりの銅銭を担いで笠を冠る庶民装束の人が見られる。さらに、図 10-6 に、この人の名が記されており、「運財童子」である。

### 6-2. 四府(左)神画に描かれる内容について(表 7)

前述したように、この種類の神画は対となるものである。そのため、四府(左)神画は四府(右)神画が逆転したように見られ、神画に描かれている神々及び脇侍の特徴や、神画の背景などもほぼ一致している。重複のように見えるかもしれないが、四府(左)神画に描かれている内容を読み取る。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

四府(左)神画の全体的な構図としては、天府神画と同様で、主神の二神がそれぞれに神画の上部と下部に描かれ、主神の後ろには脇侍が配される。神画の上部には、ほとんど字が記されていないが、但し、図1-7、図2-7、図6-7の上部に、「地府左」(右から左へ)と書かれている。

まず上部に描かれている主神を見よう。主神は向かって右を向いているが、図7-7と図8-7の主神は向かって左を向いている。主神の頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。主神の眉・眼・髪と髭の色は全て黒色である。頭に帝王を象徴する冕を冠っており、冕の両側に旒が描かれている場合があり、描かれていない場合もある。

身に帝王式の袍を着、袍の色は黒色・緑色・赤色あり、図1-7、図2-7、図4-7は黒色、図5-7、図6-7は緑色、図7-7、図8-7、図9-7、図10-7、図11-7は赤色である。袍には瑞雲や花などの模様が描かれる。

主神の両腕は、内側に90度曲げ、両手を胸の前で合わせ、手に圭を持っている。だが、図9-7と図11-7に描かれている主神の姿勢は異なっており、右手は顔の前に上げて手訣を結び、左手は袖に隠しており、両手には何も持っていない。同じの姿勢は、図9-6と図11-6の天府神画からもみられる(本節第6-1.四府(右)の項参照)。これらの対となる天府と地府神画は、異なる地域のものであるけど、どちらもタイ北部のミエンが所有していたものである<sup>33</sup>。他のミエン地域から収集した天府と地府神画からこのような神々の姿勢がみられないことによって、タイ北部のミエン儀礼神画の一つの特徴を見出すことができると考える。

主神の後ろに、旗を掲げる一人の脇侍が立っている。だが、図4-7、図6-7、図7-7、図8-7には、主神の後ろの両側に各一人の脇侍が描かれており、一人の脇侍は旗を掲げ、もう一人の脇侍は文書のようなものを持つか、あるいは持たない。脇侍は全て男性で、天府神画に描かれている文官と武官の装束とはほぼ同様である。また、脇侍らは主神と同じ向き方向に向いている。以上は神画上部に描かれている主神と脇侍らである。

次に、神画下部に描かれている主神と脇侍を見よう。神画下部に描かれる主神は、上部の主神の姿勢や装束などと比べてほぼ同じである。主神は向かって右を向き、頭部に円環形の光背が配され、立ち姿勢あるいは御座に座る姿勢で描かれている。頭に帝王を象徴する冕を冠っている。

主神の眉・眼・髪と髭の色はほとんど黒色であるが、図5-7の下部の主神は、白い眉・髪・髭の老人像として描かれている。また、図6-7の下部の主神の眉・髪・髭は、真っ赤である。また、図9-7の下部の主神の眉・髪・髭は白色であるが、顔は龍の模様であり、額に「王」字が書かれており、西遊記中の龍王のような装束で描かれている。龍王は海神であるため(窪 1986:245-246)、ここでは水府を表していると考えられる。

主神は帝王式の袍を着、袍の色は赤色・緑色・紺色・藍色・黒色がある。図4-6は紺色、図6-6、図7-6、図8-6は藍色、図2-6と図11-6は緑色である。神画下部に描かれる主神は、上部に描かれる主神の両腕の姿勢と同様で、手に圭を持っている。

神画下部に描かれる主神の周囲に一般的には脇侍が描かれないが、図2-7、図5-7、図7-7、図8-7には旗を掲げる脇侍が見られる。各神画に描かれているこの脇侍は、武官の装束(図5-7)、鬼の装束(図7-7、図8-7)、また子供のような装束(図2-7)<sup>34</sup>となっている。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

四府(左)神画の背景と四府(右)神画の背景はほぼ同じである。神画下部の右側に、官府の片隅が見られる。そこには、テーブルが描かれ、上に筆置きや紙などのものが置かれ、テーブルの後ろに官員と役人模様の人が描かれている。図4-7、図6-7、図9-7、図10-7、図11-7には、「運財童子」が描かれている。さらに図9-7と図11-7は、「運財童子」の足の下に細い道や階段のようなものが描かれており、届き先の官府へ行く道と階段であると考えられる。

本項では、四府(右)と四府(左)神画に描かれている内容の読み取りにより、この種の神画に描かれている四神の基本的な特徴と姿勢は非常に類似することが分かった。図9-7に描かれている龍王形の水府を除き、その以外の神々は目立つ特徴がつかめないため、天府・地府・陽間・水府の四神は一体誰なのかを見分けるのが非常に困難である。台北世界宗教博物館に収蔵されている神画のように、各々神の名称が明記されているにもかかわらず、四神を見分ける方法を見つけれない。

また、脇侍の装束によって、四神を見分けようも考えた。例えば、神画には、主神の後ろに立つ脇侍は鬼の装束として描かれると見られる。鬼を見て地獄を連想するので、神画に描かれる主神は、地獄の長官である酆都北陰大帝ではないかと推察する<sup>35</sup>。絵師は鬼を描くことを通して地府を表していると考えられる。しかし、天府・陽間・水府はこの方法で見分けることができなかった。

神画に描かれる天府・地府・陽間・水府に関する描写は、Lemoine は次のように述べている。

天の総督(天府)は、いつも黄色の袍を着、皇帝風の帽子を冠る。彼は筆と祝福の言葉が書かれた銘文を持って示している。[Lemoine 1982 : 101 PL. 156]

地の総督(地府)は、横たわった虎に着座して示されている[Lemoine 1982 : 101-102 PL. 158; PL. 160]。総督画像の足のところで、二つ目の宝庫が見られる。図162における銘文は「国民庫■」と書かれている。そしてその閉じた二重扉に「積玉堆金、庫蔵興■」と書かれている。[Lemoine 1982 : 101-102 PL. 158; PL. 162]

水の総督(水府)はいつも赤い袍を身に着けている。〈中略〉彼は横たわった龍の背に着座している[Lemoine 1982 : 98 PL. 148]。もっと重要なのは、水の総督絵画の一番下に示されている小さな光景である。三階建ての建物のようなものが見られ、ドアのそばに、あるいは彼のオフィスで役人風の人が待機している。これは右の宝庫であり、そしてそのお金は「運銭童子」によってもたらされる。彼は紐で繫いだ銅製の現金を負荷し、半肩に吊り下げている。[Lemoine 1982 : 98-99 PL. 145-146]

威厳があるこの世の皇帝(陽間)は、高級官吏の太尉が冠る帽子と同じようなもの、また玉皇や聖主のような真珠の旒が付く皇帝の帽子のようなものを冠って描かれている。彼は時々赤い袍を着、太尉のようである。あるいは黄色の袍を着、玉皇のようである。兵士

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

は彼の旗を運ぶ。一人の女性の脇侍は金色のシルクの布に包まれた贈り物を持ち歩く。図138中、彼は右手に筆を持つと示されている。彼はちょうど銘文を書いた。銘文は、「宝物や穀倉があふれて充填するかもしれないように、私は自分の祝福を下に送る。この縁起の良い予兆を喜び、玉を授け、及び金が提供される。」と書く。[Lemoine 1982 : 97 PL. 138]

文中の天府・地府・陽間・水府の描写から、Lemoine が取り扱う神画に描かれているこの四神の、頭に冕を冠って身に皇帝式の袍を着るといった基本的な特徴（頭に冕を冠って、皇帝の服装）は、筆者が収集した神画と比べてほぼ同じである。それから水府神画に描かれている、三階建ての建物とその建物で待機している役人のような人物、及びお金を運ぶ「運財童子」は、筆者が取り扱う神画からも見られる。

しかし、異なる点も幾つか見られる。第1の点は、神画に描かれている四神の姿勢である。筆者が分析した神画の中、天府・地府・水府・陽間の四神は、両手を胸の前で合わせて圭を握るが、Lemoine が述べたような天府・地府・陽間が手に筆を持ち、銘文を示しているというシーンは見られない。

第2点は、神が動物に乗ることである。筆者が取り扱う神画の中の四神は、立つあるいは御座に座る姿勢として描かれるが、動物に乗る姿勢は一つもない。Lemoine は地府と水府はそれぞれ横たわった虎と龍に乗っているとするが、*Yao ceremonial paintings* に掲載された神画をよく見ると<sup>36</sup>、地府が乗っているのは確かに虎であるが、水府が乗っている動物は龍ではなく、獅子である。この点においては、Lemoine は読み間違えている。

第3点は、脇侍が持つ旗に縁起の良い言葉が書かれることである。第4点は神画に宝庫が描かれることである。筆者が取り扱う神画にはこれらの祝言と宝庫が見られない。

以上Lemoine と筆者の取り扱う神画の内容の異同について考察した。神画全体の構図と神画に描かれる神々の様子はほぼ同じである。

### 第7項 張天師神画に描かれる内容について（別冊・表8）

『道教事典』によれば、「張天師、正一教（派）の教主一般的な呼称。正一教では五斗米道を唱えた張陵を始祖とし、張陵を天師と称した事から教主を天師、教団を天師道と称し、教主は張陵の子孫に世襲された。後に天師道は正一教、天師は真人と改められたが、民間では正一教主を張天師と呼称して現在に至っている」という[野口ほか(編) 1994 : 408]。

張天師神画には、張天師は神画の中央部に大きく描かれるが、脇侍が配されていない。また、図6-8の上部には、「張天師」という文字が記されている。

張天師は、両腕は内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で向かって左を向く（図2-8の張天師は向かって右を向く）。また虎に乗る姿として描かれる場合もあり、図9-8と図11-8の張天師はその姿勢となる。また図11-8に描かれている張天師の腕の姿勢は他の神画と異なり、左手は剣を縦に持っており、右手は立掌しながら手訣を結ぶ。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

張天師の頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。張天師は三つの眼を持ち、三つ目の眼は額の中心にある。髪の毛は頭頂で結び、その上に髮冠を冠る。両鬢の髪の毛は犬耳のように立っている。眉尻を高く上げ、目は丸く大きく見開く。髭は鐘馗のように鬢まで続く。眉・眼・髪と髭の色は赤色あるいは黒色であり、図1-8-1、図1-8-2、図2-8、図8-8、図9-8、図10-8は赤色で、図4-8、図5-8、図6-8、図7-8、図11-8は黒色である。

張天師は袍を着るが、八卦模様(☰・☷・☱・☵・☲・☴・☶・☳)の八卦袍と龍袍も見える。図2-8、図6-8、図7-8、図9-8、図10-8、図11-8の張天師は八卦袍を着、図1-8-1、図1-8-2、図11-8は龍や瑞雲や浪などの模様の袍を着る。また図5-8、図8-8は花と瑞雲模様の袍を着ると描かれている。袍の色に関しては、主に赤色で描かれているが、他には黄色と白色も見られる。図1-8-1と図1-8-2の張天師は黄色の袍を着、図6-8は白色の袍を着る。

神画の背景として瑞雲が描かれている。図10-8には劍が描かれており、図11-8の下部の右には1羽の鳥が描かれている。

### 第8項 李天師神画に描かれる内容について(別冊・表9)

李天師神画と張天師神画は対となるものである。通常李天師は向かって右を向き、張天師は向かって左を向くと描かれるが、時には、李天師が向かって左を向き、張天師が向かって右を向くように描かれる場合も見られる(図2-8, 図2-9)。

李天師は、神画の中央部に大きく描かれ、脇侍が配されていない。神画の上部には、「李天師」が記されている(図1-9, 図6-9)。また上部の中央には、「卍」という符号が書かれる場合もある(図2-9)。

李天師は、両腕は内側に曲げ、両手を合わせて圭を縦に持ち、胸まで上げた立ち姿で右を向く。通常立つ姿勢で描かれているが、麒麟や獅子に乗る姿で描かれる場合もある。図9-9の李天師は獅子に乗るが、図11-9は麒麟に乗って描かれている。また、図11-9に描かれている李天師の腕の姿勢は他の神画と異なり、左手は立掌しながら手訣を結び、右手は劍を縦に持っている。また、図9-9と図11-9の李天師は鞋を履いておらず、素足の姿で描かれている。

李天師の頭部に円環と炎状の光背が配され、光背の周りに赤色や青色などの瑞雲が描かれている。通常髪の毛は頭頂で結び、その上に髮冠を冠るが、髪は肩にぶら下がって描かれる場合も見られる(図9-9, 図11-9)。眉・眼・髪と髭の色は黒であるが、5-9の髪の毛は緑色で描かれた。

李天師は八卦袍あるいは龍袍を着る。図1-9、図2-9、図6-9、図7-9の李天師は八卦袍を着、図9-9、図10-9、図11-9は龍と瑞雲模様の龍袍を着る。また花と瑞雲模様の袍を着る場合もある(図4-9, 図5-9, 図8-9)。袍の色に関しては、通常黒色で描かれているが、他には紺色と藍色も見られる。図4-9は紺色で、図5-9、図7-9と図8-9は藍色である。

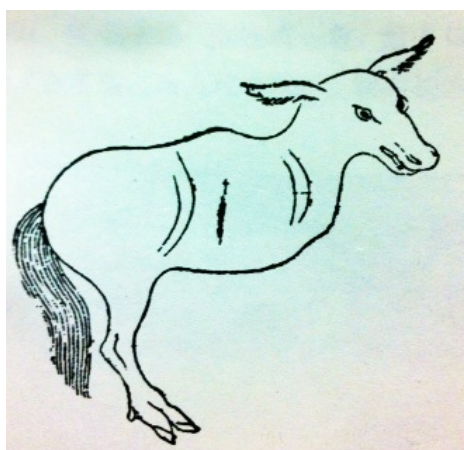
神画の背景として瑞雲が描かれている。図1-9、図2-9、図10-9には、さらに劍が加えられている。図9-9には、さらに華蓋が加えられている。図9-9、図10-9、図11-9の下部には、さら

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

に亀と蛇が描かれている。図 11-9 の左上には、さらに蝙蝠が描かれている。中国語の中で、蝙蝠 (biānfú) の発音は「変福」(biànfú、福になる)と音が近いので、中国では吉兆とされる。神画に蝙蝠を描くことも同じ意味を表していると考えられる。

李天師の乗っている獣について、Lemoine は「李天師は、巨大な水牛のようなものに乗っている。この獣は中国神話中の夔牛きぎゅうと呼ばれるものである。」という [Lemoine 1982:71 PL. 69; PL. 70]。夔牛に関しては、『山海経』<sup>37</sup> には記されており、次の通りである。

東海の中に流波山あり、海につきでること七千里、頂上に獣がいる、状は牛の如く、身は蒼くて角がなく、足は一つ。これが水に出入するときは必ず風雨をともない、その光は日月の如く、その声は雷のよう。その名は夔。



〈図 7〉 『山海経図』に描かれる夔<sup>38</sup>

『山海経』[『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』1998:497-499]に記された夔の描写から、夔は「状は牛の如く、身は蒼くて角がなく、足は一つ」という様子が分かる。しかし李天師神画に描かれている、Lemoine に夔牛だ比定される比定獣の様子は、『山海経』の記述と一致していない。よって、李天師が乗っているのは、夔牛ではないと言える。この点に関して、Lemoine は読み間違えたと考えられる。筆者は、その李天師神画に描かれている、顔は獅子に似て、獅子の尾と牛の蹄と鹿の角を持ち、体表に鱗を覆うという特徴を持つ獣は麒麟だと推断する。

### 第9項 把壇師(趙元帥)神画に描かれる内容について (別冊・表 10)

把壇師(趙元帥)神画に描かれる主神は趙元帥であり、元帥神が描かれる神画の中の種類である。本論で取り扱う神画資料の中に、元帥神が描かれる神画は、4種類があり、把壇師(趙元帥)神画の他には、馬元帥、王靈官、鄧元帥神画がある。ここでは、まず把壇師(趙元帥)神画に描かれる内容を読み取る。

「把壇師」という神画の名称は、主に湖南省永州市藍山県過山ミエンの祭司が使っている名称である(図 1-10, 図 2-10)。「把壇」とは、祭壇を守備する意味である。神画には、元帥神が描かれているので、「把壇師」は、祭壇を守備する元帥の意味であると考えられる。「把壇師」神画は、タイ北部のミエン地域では「趙元帥<sup>39</sup>」と呼ばれる(図 9-10, 図 11-10)。また、台北世界宗教博物館に収蔵されている広西壮族自治区南寧市賓陽県ミエン地域の神画には「把壇元帥」とも書かれる。筆者は現地調査の際に、ミエンの祭司は神画名を「把壇師」と書くのを確認したが、神画に趙元帥が描かれているため、本論では合わせて「把壇師(趙元帥)」という名称を用いる。



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

神画の全体的な構図としては、把壇師は中央に描かれており、下部の左右には各一人の脇侍が描かれている。図 1-10 と図 2-10 の上部には、文字が書かれており、一部が剥離しているため、正確に読み取れないが、「把壇師」あるいは「把堂帥」と書かれていると看取できる。

通常把壇師(趙元帥)は立ち姿勢であり、左を向くか、あるいは右を向く。他には、虎に乗る姿勢も見られる(図 10-10)。把壇師の左腕は、内側に曲げて胸の前に置き(図 1-10、図 9-10)、あるいは体の横に置く(図 2-10)。手に金輪を持ち<sup>40</sup>(図 9-10)。右腕は上方に高く上げ、手に鉄鞭を持つ。

把壇師(趙元帥)は武官の装束であり、頭に武官の帽子を冠っており、帽子の両側に犬耳のような髪の毛が立っている。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉尻が上に上がり、目は丸く見張ったようである。黒色の上着を着、赤色の裳を穿く。衣装には太陽のような模様を描かれている(図 9-10)。

神画下部の両側に、二人の武官形の男脇侍がそれぞれ立っている。通常二人とも把壇師と同じ方向を向くと描かれる。時には、右側の脇侍は振り返って左側の脇侍を見つめるように描かれるのも見られる(図 1-10、図 2-10)。神画の背景として瑞雲が描かれている。

### 第10項 馬元帥神画に描かれる内容について(別冊・表11)

馬元帥は先述したように、元帥神が描かれる神画中の一種類である。馬元帥神画全体的な構図としては、中央に主神である馬元帥を大きく描き、下部には二人の男性の脇侍が描かれている。また、神画の上部に「馬元帥」という文字が書かれているのも見られる(図 6-11)。

馬元帥は立ち姿であり、向かって右を向く。左腕は内側に曲げて胸の前に置き(図 1-11、図 9-11)、手に圭(図 8-11)或いは鉞(図 6-11)を持つ。右腕はやや曲げて体の横に置き、手は手訣を結ぶ。武官の帽子を冠り、頭部に輪状の光背を配し、肌が白い若い男神である。通常黄色の上着を着るが、緑色の上着を着て白色の裳を穿いてと描かれる場合もある(図 6-11)。

神画下部の左右に、二人の武官形の男性の脇侍がそれぞれ立っている。向かって左側の脇侍は武官の帽子を冠り、藍色の袍を着、腰に白色の腰巻きを巻く。図 6-11 に描かれている向かって左側の脇侍は、帽子を冠っておらず、髪の毛を頭の頂に結び頭巾で隠す。白色の衣を着、腰に白色の腰巻きを巻き、黄色の裳を穿く。素足で靴を履いていない。左腕はやや上へ上げ、手に黄色の盞を持っている。

向かって右側の脇侍は、黒色の衣を着、黄色あるいは赤色の裳を穿く。武官冠を冠り、帽子の両側に犬耳のような髪の毛が立っている。髭は鐘馗のように鬚まで続く。眉尻が上にあがる。髪の毛と髭の色が真紅である。右腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、左手は剣体を支える。また神画の背景としては、瑞雲が描かれている。

### 第11項 王靈官神画に描かれる内容について (別冊・表12)

窪徳忠によれば、「王靈官は、姓は王、名は奕または善といい、元始天尊の命をうけた姜子牙すなわち呂尚によって、九天応元雷声普化天尊に任命された聞仲の指揮下に属している雷部二十四神の中の一人で、雷を起こし、雨を助ける神となっている」という[窪 1996 : 217-218]。

王靈官神画は、また「黄元帥」とも書かれる(図6-12)。中国の西南官話では、「黄(huáng)」字と「王(wáng)」字の発音が非常に似ているので、「黄元帥」は「王元帥」の書き間違いではないかと考えられる。本論では、筆者の聞き書きにより、「王靈官」という名称を用いる。

神画の全体的な構図としては、主神である王靈官は中央部に大きく描かれ、下部両側に各一人の脇侍が描かれている。神画の上部には、「黄元帥」という文字が書かれている(図6-12)。

元帥は立ち姿勢であり、向かって左を向く。右腕は内側に曲げて胸の前に置き、手に剣あるいは鉄鞭(図2-12)を持つ。左腕はやや曲げて体の横に置き、手訣を結ぶ。頭に髪冠を冠り、冠の両側に犬耳のような髪の毛が立っており、勇猛そうに見える。髭は鐘馗のように鬢まで続く。眉・髭・髪の色は全て赤色である。額の中心に三つ目の眼がある。

神画下部の両側に、二人の武官装束の男脇侍がそれぞれ立っている。向かって左側の脇侍は武官冠を冠り、武官式の衣裳を着、左腕を内側に曲げ、手に剣を持ち、右手は剣体を支える。向かって右側の脇侍は、鳥口先で三眼を持つ。上半身は裸で、赤色あるいは藍色の裳を穿き、腰に虎皮を巻く。右手に斧を持ち、高く上に上げており、左手に錐を持ち、胸の前に置く。両足は鶏脚であり、素足で火車を踏む。髪と眉毛が真紅であり、背中に羽が伸び、皮膚が青色である(図7-12)。この脇侍の様子は、鄧元帥神画に描かれる鄧元帥と完全に一致している。よって、鄧元帥だと推断する。また図2-12に描かれている向かって右側の脇侍は、異なる様子であり、髪冠を冠り、肩に白色の巾を縛り付け、腰に白色の腰巻を巻き、赤色の裳を穿く。右腕を内側に曲げ、手にチャルメラのような形の法具を持っている。神画の背景として瑞雲と炎が描かれている。

### 第12項 鄧元帥神画に描かれる内容について (別冊・表13)

鄧元帥神画は、筆者の収集した元帥類の神画の中では数的に少ない神画の種類である。この類の神画は主にタイ北部のミエンに用いられる。湖南省永州市藍山県・江華瑶族自治县・広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエン地域において、鄧元帥は主神として神画の中央に描かれず、通常王靈官神画の下部の脇侍として描かれる。

鄧元帥は雷部の2四神の一人であり、雷部の神将として活躍するとされる[野口ほか(編)1994 : 584]。神画全体的な構図としては、中央に鄧元帥を大きく描き、下部には二人の男脇侍が描かれている。

鄧元帥は立ち姿勢であり、向かって左を向くか、あるいは右を向く。頭に金色の髪冠を冠り、頭部の周囲には真赤な炎が描かれている。右腕は内側に曲げて腹の前に置き、手に斧を持つ。左

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

腕は高く上に上げており、手に錐を持つ。元帥は鳥口先で三眼を持つ。袖がない赤地あるいは緑地の鎧を着る。髪・眉・鼻・頬の色が真紅であり、背中に羽が伸び、皮膚が青色である。

神画下部の両側に、二人の武官装束の男性の脇侍がそれぞれ立っている。二人とも武官冠を冠り、鎧を着る。神画の背景として瑞雲と炎が描かれている。

### 第13項 大海幡神画に描かれる内容について（別冊・表14）

ミエンが伝承している神画の中で、「海幡」という神が描かれる神画は2種類ある。神画に描かれる内容によって区別するなら、「上刀梯」と呼ばれる刀の梯子を登る儀礼の場面などが描かれるのは「大海幡」神画であり、黒蛇に乗ると描かれたのは「海幡張趙二郎」神画である。「大海幡」「海幡張趙二郎」という名称中に、いずれも「海幡」の二文字を使っており、しかも神画に描かれるこの二神の着ている服装や装束なども非常相似しているため、同じ種類の神だと推断する。

この二神に関して、藍山県書表師の馮榮軍氏から一つの興味深い話を得た。以下、その話の内容を述べる。

ある日、一人が山で二つの石が喧嘩しているのを見かけた。その人は喧嘩をやめるように説得したら、二つの石はすぐ喧嘩をやめ、一つの石がゴロゴロと山の頂上へ転がって行き、もう一つの石がゴロゴロと山から転がり河に落ちて行った。山の頂上へ行ったのは、上海幡となり、河に落ちたのは下海幡となる。

以上の話から、藍山県のミエンが考えている「海幡」という神は、山を登る特性を持つ「上海幡」及び水と関わりがある「下海幡」の区別がある。「上海幡」の山を登る特性は、「大海幡」神画に描かれる海幡神の刀梯を掴んで登る姿勢から強く現れている。よって、「大海幡」神画に描かれているのは、「上海幡」であろう。「下海幡」の水と関わりがある特性は、「海幡張趙二郎」神画に描かれる黒龍から見えるので<sup>41</sup>、「海幡張趙二郎」神画に描かれるのは「下海幡」であろう。ここでは、まず「大海幡」神画に描かれる内容の読み取りを行う。「海幡張趙二郎」神画の読み取りは「第15項 海幡張趙二郎神画に描かれる内容について」で行う。

「大海幡」という神画の呼称に関して、主に湖南省永州市藍山県で使われている呼称であり、また同地域の神画の上部には「大海番」という文字が書かれているのも確認できる。湖南省永州市江華瑶族自治县及び広西壮族自治区恭城瑶族自治县では、通常「海番」と書かれるが、タイ北部では「大堂海番」「大海翻」と書かれる。「海幡」の「幡」という文字の使用に関して、非常に自由に使われていると見られる。「番」の他には、同音異字の「幡」「幡」「翻」とも書かれる。この種類の神画には「黄幡（黄色の幡）」が描かれているため、本論では統一して「幡」字を使う。

大海幡神画全体の構図としては、大海幡は神画上部の中央に大きく描かれ、向かって神画の左

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

側と下部には刀の梯子を登る場面などが描かれている。

まず刀の梯子を登る場面から見て行きたい。向かって神画の左側に「雲台」と呼ばれる高い櫓のようなものが描かれ、とそこに掛けられた刀の梯子が描かれている。梯子は約24本の長い刀で交差させて組まれている。梯子の左側に竹葉が生えている竹竿が立たせており、その枝に黄色の細長い幡を掛けている。さらに、幡には「太上昊金闕陽傳大幡堂樹」(図2-14, 図4-14)、或いは「太上昊金闕陽田大幡堂樹」(図5-14)という文字が書かれる。

「雲台」の上には、一人或いは二人の祭司のような者が描かれている。彼らは赤色或いは藍色の袍を着、手に角笛や師棍などを持っている。

梯子に、二人の刀梯を登る者が描かれ、一人はあと少しで「雲台」の上に届くので、刀梯を掴み、下の登梯者を眺めている。下にいる者はまだ二段くらいしか登っておらず、両手で梯子を掴み、足先で慎重に刀の上を登っている。二人共赤色あるいは深緑色の袍を着、素足である。さらに、図2-14、図4-14、図5-14の下の登梯者の右手に角笛を持っていると見られる。

二人の登梯者とともに、大海幡も一緒に梯子を登っている。大海幡の両足は素足で、足首から膝まで白地の脚絆を巻く。右足は刀梯の中段あたりを踏み、右手は刀梯の最上段を掴み、左腕は内側に曲げて胸の前に置き、手に酒盃を持っている<sup>42</sup>。大海幡の服装に関して、図2-14、図4-14、図5-14は、藍地あるいは黒地の上着を着て赤い裳を穿くのが描かれる。図1-14と図3-14は、赤色の袍を着て肩に虎皮を掛けるのが描かれる。大海幡は冠を冠らず、額に赤色の縄を縛り付け、頭両側のこめかみのところに各一枚の符を挟んでいる。

向かって神画の下部の左側には、祭壇が描かれ、上には酒杯や酒壺が描かれている(図1-14)。祭壇の前に二人の男性が描かれており、彼らは両手に圭のようなものを持ち、跪いて礼拝の姿勢をとる(図1-14, 図3-14)。さらに祭壇の上部には、「文台<sup>43</sup>」というものが見える。そこには炎が描かれ、儀礼文書を燃やしていると現していると考えられる(図1-14, 図3-14)。

むかって祭壇の右側には、五六人の楽師がおり、チャルメラを吹いたり、笛を吹いたり、鑼鼓を鳴らしたりする様子として描かれている。

楽師たちの上部に、黒龍に乗っている上半身裸の男性が描かれ(図2-14, 図4-14, 図5-14)、あるいは馬に乗る役人が描かれている(図1-14, 図3-14)。神画の背景として瑞雲が描かれている。

### 第14項 十殿神画に描かれる内容について(別冊・表15)

十殿神画は、十人の閻王及び地獄の風景が描かれる神画である。「十王とは冥界にあつて亡者の罪業の処断を司る十人の王、すなわち秦広王、初江王、宋帝王、五官王、閻魔王、變成王、太山王、平等王、都市王、五道転輪王を指す」という[津田徹英 1991: 51]。

十殿神画の最上部に、「拾殿右」という文字が記されている(図3-15)。神画上半部において、向かって右の下から右の上、そして神画の上、また神画の左の上から左の下までに、「一殿」から「十殿」まで十王が描かれている。十王とも帝王が冠る冕を冠り、袍を着、神画の中央を向

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

くと描かれている。通常「一殿」から「十殿」まで書かれるが、具体的にどの王であるのかを明記されないが、図 9-15 のように丹念に十王の名称まで具体的に明記する神画も見られる。

十人の王が囲まれている神画上部にある空間と、神画の下半部には、幾つかの地獄の風景が描かれている。神画の一番下に描かれている「地獄門」から上まで順番で見て行きたい。

通常神画の一番下には、「地獄門」が描かれており、左右には馬頭と牛頭が立っている。またその両側に、上半身が裸の罪人の両手を引っ張って地獄に入れようとする獄卒の鬼が描かれている。

地獄の門の上部には、橋が描かれ、上には3名女性が描かれている。ここの橋は「奈何橋」と呼ばれる橋だと考える。まだその上には瑞雲で幾つの空間に分けられている。下から上まで見て行くと、向かって左側には鋭い刀の山があり、獄卒の鬼は罪人を刀の山の上に投げ、山に突き刺される罪人の血が山に満ち溢れる様子が描かれている。向かって右側には、獄卒の鬼は猛火に罪人を入れ、あるいは釜に入れようとする様子を描かれている。さらにその上部には、大きな釜が描かれ、獄卒の鬼は罪人を釜に入れて鉄の棒で刺し煮る様子を描かれている。その横には、獄卒の鬼は罪人を踏み臼で粉砕している様子が描かれている。またその横に、一人の獄卒は、刀を持ち、罪人の髪の毛を掴み、罪人を切る様子が描かれている。また、その上部には、獄卒の鬼は罪人を臼で粉砕している様子が描かれている。あるいは、二人の獄卒の鬼は鋸で罪人を切り裂く様子が描かれている。さらに、獄卒の鬼は秤で罪人の罪を測る様子が描かれている。さらに、大きな鏡が描かれている。鏡の横には、二人の役人が描かれており、彼らは罪人を鏡の前に立たせ、前世の罪を映している。

以上読み取りを行った複数の十殿神画の中には、図 1-15 が含まれていない。なぜ図 1-15 を取り除いたかという点、図 1-15 には、5人の王と地獄の様子が描かれており、本論で取り扱う図 1-15 以外の1点に十人の王をまとめて描く十殿神画と完全に異なるタイプのものだと判断したからである。顔新元は「洞庭湖南岸の祭祀絵画」中で「亡魂を済度する儀礼に用いられるく大功德画」の中で対になるく左十王」とく右十王」があり、2点の掛け軸の内、1点には5人の王と相応する地獄の様子が描かれる。祭壇に掛ける際に、左右互いに対応する。」と述べている[顔新元 1994: 24-36]。顔氏が言っているく左十王」く右十王」というタイプの十王を描く神画は、図 1-15 のタイプと同じであると考えられる。神画に描かれる神々の向き方向から、図 1-15 はく右十王」だと推断する。残念ながら、この神画の所有者の趙金付氏は、図 1-15 と対応するく左十王」を持っていない。

### 第15項 海幡張趙二郎神画に描かれる内容について (別冊・表 16)

海幡張趙二郎神画は、また「龍樹海幡」「海番過海」「小堂海幡」などとも書かれる。祭司はこの神画を「海幡張趙二郎」と呼び、また儀礼文献にも同様な名称が記されているので、本論では、この名称を使って統一する。

神画全体の構図としては、中央に海幡張趙二郎が描かれ、下部の両側には各一人の従者が描か

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

れている。

海播張趙二郎は向かって右を向き、黒龍に乗る姿勢となる。虎皮の肩掛けを掛け、赤色のズボンを穿く。素足で足首から膝まで縞模様の脚絆を巻き、赤い紐で縛っている。右腕は内側に約90度曲げ、胸の前に置き、手に酒杯を持ち、左腕は高く上げ手訣を結ぶ。海播張趙二郎の靴の片方は膝の前に、もう一つは大蛇の尻尾の先に被せて描かれている。

海播張趙二郎が乗っている黒龍は、頭をもたげ、大きな目が上方を見る。額の中心に角を一本生やしている。口を大きく開き、真赤な舌を出し、上下の牙が見える。神画の上部の右側と、海播張趙二郎の脚の下には、大きな球状のものが描かれている。球の周囲に炎が描かれていることから、火玉だと推察される。

神画の下部には、二人の馬に乗る武将姿の男性の従者が描かれる。向かって左側の武将は、主神の向きと同じく右を向く。右側の武将は、振り返り左側の武将を見ている。神画の背景として瑞雲が描かれている。

### 第16項 太尉神画に描かれる内容について(別冊・表17)

太尉神画は、「太位」「大位」「行象太尉」「大堂太尉」とも書かれる。時には神画に「太尉」と記されているのに、祭司は「太歳」と書く場合もある。儀礼文献に記されている神々の名称の中に、「太尉」という名称が多く使われているので、本論では、「太尉」を用いて統一する。

太尉神画の全体的な構図としては、神画の上部には、「太尉左」という文字が記され(図3-17)、中央部に太尉が大きく描かれ、太尉の後ろに一人の旗を持つ脇侍が配され、神画の下部に馬に乗る脇侍が描かれている。向かって図1-17の最上部の右側に銘文も書かれている。

太尉は、向かって体が左を向き、顔が正面を向く。通常武官の冠を冠り、身に赤色の袍を着、白馬に乗る姿勢として描かれる。時には紫がかった深赤色の袍を着、黄色の馬に乗ると描かれるのも見られる(図7-17-2)。右腕は高く上にあげ、手に長い剣を持っている。左腕は内に曲げ胸の前に置き、手に酒盃を持つ。腰には花模様の腰巻を巻き、脚には黒い長靴を履く。

太尉の後ろには、旗をかかげる男性の脇侍がいる。旗には「令」という文字を書かれる場合もある(図1-17)。神画の下部には、二人の馬に乗る脇侍が描かれている。時には3人或いは5人として描かれることもある。これら脇侍たちは、武官帽を冠り、武官の衣裳を着、手に剣或いは角笛などの法具を持っている。神画の背景としては瑞雲が描かれている。

### 第17項 三將軍神画に描かれる内容について(別冊・表18)

三將軍は即ち、道教神の上元唐將軍・唐文明、中元葛將軍・葛文慶、下元周將軍・周文剛であるという[王秋桂ほか 1989: 99-100]。

三將軍神画の構図としては、神画の最上部に「三將軍」の文字が書かれ(図1-18)、それから瑞雲で上部・中部・下部の三つの部分に分け、それぞれの空間に、各一人の將軍が描かれてい

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

る。三人の将軍とも、兜を冠り、鎧を着る。あるいは武将の衣裳を着る。以下、上部の空間から下部の空間まで、各々の将軍の姿を見て行きたい。

上部に描かれている唐将軍は、向かって左を向く。右腕は高く上を上げ、手に剣を持っており、あるいは手訣を結ぶと描かれている。左腕は後方に出し、手に剣を持ち、あるいは小旗を持っている(図1-18)。

唐将軍の後ろには、雷公<sup>44</sup>が描かれている(図1-18)。雷公は右腕を高く上げ、斧を持ち、左腕は胸の前で曲げ手に錐きりを持ち、斧で錐を叩いているようにも見える。雷公の肌は青色で、髪と眉は赤色である。背中に羽根がついており、口先と両足を鶏のように描かれる。足元には4つの腕が描かれ、雷公はその中の二つを踏む、腕の下から猛烈な焰が噴き上がっている。

中部に描かれている葛将軍は、向かって左を向く。左手は指笛を吹くしぐさをする。右腕は高く上を上げ、手に刀を持つ(図1-18)。あるいは、箭を射るしぐさをする(図2-18)。或いは両手に剣を持ち、片手は胸の前に置き、もう一つの手は後方に出している(図2-18、図4-18)。

下部に描かれている周将軍は、葛将軍と同様の方向で。周将軍は指笛を吹くしぐさをするか、或いは箭を射る姿勢を作る(図1-18)。

三将軍神画に関して、Lemoine は、*Yao ceremonial paintings* の中で、三将軍神画はミエンの神画のセットの中でめったに見られないものであるという[Lemoine 1982: 123]。Lemoine の言うようにタイでは三将軍神画がめったに見られないものかもしれないが、しかし中国湖南省永州藍山県、江華瑶族自治县、広西壮族自治区恭城瑶族自治县のミエン地域では、祭司が所有する行師神画(太尉・海幡張趙二郎・三将軍・総壇)を構成する最も基本となる神画であるため、珍しいものではない。

### 第18項 監齋大王神画に描かれる内容について(別冊・表19)

筆者の聞き書きによると、「監齋大王」という呼び方は、主に湖南省永州市藍山県と江華瑶族自治县のミエン地域で使われている。広西壮族自治区恭城瑶族自治县では、「監齋」のみ呼ぶが、「大王」の二文字が省略されている。この神画は、比較的少ないため、本論で取り扱う神画の中には4点あり、その内容は以下のように紹介する。

神画全体的な構図としては、上部の中央に監齋大王が描かれ、下部には調理する場面が描かれる。

監齋大王は、黄色の虎に乗る姿勢で描かれており、武官の帽子を冠り、黒色の上着を着、赤色の裳を穿き、黒色の長靴を履く。両鬢の髪は犬耳のような形であり、頭部の両側に立っている。鬚は鍾馗鬚のように鬚まで続く。髪と鬚の色は赤色である。監齋大王の左腕は内側に曲げ、手に金環を持っている。右腕は上に高く上げ、手に剣を持っている。また、監齋大王の下に長方形のテーブルが描かれており、向かってテーブルの左側に文書を持っている文官が立っており、右側に鞭を持っている武官がおり、中央にいる男性を殴る姿勢となる(図4-20、図6-20)。また、テーブル前に両手で餅を高く捧げる女性もいる(図4-20)。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

神画の下部に、民族衣裳を着ている男女は調理している場面が生き生きと描かれている。長い杵を持って餅を搗く人、その餅を丸く縮まる人、竈の前で竹の管で火を吹く人、てんびん棒で水を運ぶ人、薪を切る人が描かれている。また左手に煙管を持ち、右手で傘を差す若い女性が描かれている(図1-20, 図2-20)。さらにこの女性の向かいには、左手に扇子を持ち、右肩に傘を担ぐ若い男性も描かれている(図1-20, 図2-20)。

### 第19項 総壇神画に描かれる内容について<sup>45</sup>

本論で取り扱う異なるミエン地域から収集してきた神画の中には、儒仏道そしてヤオ族の神々が一壇に描かれているとされる「衆神図」がある。この種の神画は総壇と呼ばれる。また、「行象総壇」「総壇七十二神」「行司官像」「壇」とも書かれる。本論では、統一して「総壇」という用語を使う。

総壇神画には、他の種類の神画に描かれる主神らも含めて約70余の神が描かれている。しかも上から下まで、神々の位により九つの階層に分けて描かれている。神画の構図としては、それぞれの階層の中央に主たる神を描き、左右両側の神々は中央に向かって拝謁する姿勢をとる。

総壇神画の一番上となる第1層には、長方形のテーブルが描かれ、そのテーブルのところに炎状の光背が配され三清(元始天尊・靈寶天尊・道德天尊)と、円形の光背が配される玉皇・聖主が描かれる。黒色の衣を着ている元始天尊は最も中央に位置し、元始天尊の前に三つの酒盃<sup>46</sup>が置かれている。元始天尊から見ると、左側は深い緑色の衣を着ている道德天尊であり、右側は紺色の衣を着ている靈寶天尊である。三清の向かって左右には、それぞれに黄色の衣を着る玉皇と黒色の服を着る聖主が描かれている<sup>47</sup>。玉皇と聖主とも、冕を冠り、両手を合わせて圭を持ち、左右の両側から中心を向き、中央にいる三清に拝謁する姿勢をとる。また、向かってテーブルの左右には、張天師と李天師だと推断される人物が描かれている(図1-19)<sup>48</sup>。

第2層と第3層の中央となる神は白衣の観音である<sup>49</sup>。向かって第2層の観音の肩の左右にあたる場所に若い女男が描かれ、観音の脇侍の玉女と金童であると考えられる(図1-19, 図4-19)。またその左右に名前の不明な神々が描かれている。それから、第3層には、兜を冠る將軍のような武将及び、冕を冠る神が多く描かれているので、おそらく神将と天帝たちではないかと推測する。

第4層の中央となるのは、盤古とされる三面六臂の神である<sup>50</sup>。6本の手のうちの2本に日と月を持ち、高く挙げる。またそのうちの他の2本は胸の前で組み、拝謁する姿勢を作る。またそのうちの他の2本に刀を持っている。この神の左右には刀を持つ兜を冠る將軍及び武将らが描かれている。

第5層の中央となるのは、「雲頭龍鳳三姐妹」だとされる3人の女性である<sup>51</sup>(図1-19)。その左右には、筆と文書を持っている判官だと思われる文官が描かれており、また両手で圭を持つ文官らも描かれている。

第6階層の中央となるのは、兜を冠る3人の將軍が描かれている。この三神は、唐・葛・周三



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

将軍であると考え。三神とも剣を縦に持っている。三将軍の両側には、馬に乗り、圭を持つ武官らが描かれている。

第7階層の中央となるのは、虎に乗り、赤色の衣を着、手に剣を持ち、太尉だと思われる神である<sup>52</sup>。太尉の両側には、それぞれに二人ずつの功曹だと思われる武官が描かれている<sup>53</sup>。その他には、馬に乗る武官らも描かれている。

第8階層の中央には、位牌状の物が描かれ、その中に香炉が描かれている。その左右には、6柱の元帥が描かれ、6神とも馬に乗っている。

第9層には、左から右まで、杖を持つ土地公、逆立ちをする張五郎、「犀牛皆上兵」「猛虎毒蛇兵」「麒麟獅子兵」だと思われ刀を持ち、牛・象・獅・虎・麒麟に乗る5武官が描かれている<sup>54</sup>。土地公に関して、土地婆と共に描かれる場合もある(図11-19)。また、土地公は中国式の家屋の底の下に立つと描かれる場合もある(図2-19, 図4-19, 図5-19, 図7-19, 図11-19)。儀礼で用いられる文献に土地公をまた「住宅土地」とも書かれる。神画に土地公の居るところに家屋を描くことは、土地公は「住宅」の土地神であることを現れているのではないかと考える。

総壇神画の複数の階層を用いて神々の階位を表すという構図の方法は、道教神仙系譜の『洞玄靈宝真靈位業図』と非常に類似している。よって、ミエンのこの種の神画の創作は、道教の『洞玄靈宝真靈位業図』の影響を受けていると考える。特に、総壇神画の第1層の中央の位に描かれる主神の元始天尊は、『洞玄靈宝真靈位業図』の第1層の中位に描かれる主神と完全に一致していることが見られる<sup>55</sup>。これによって、ミエンにとって、元始天尊は間違いなく最高神であることがはっきりと分かる。総壇神画に描かれる神々の階位から、ミエンは自らの信仰している神々に対する地位の高低の評価でもあり、彼らの信仰神の系譜を反映するイメージ図でもある。総壇神画の第1層から第9層まで、ミエンの信仰している神々の階級の区別を明確にし、彼らが意識している神の系譜を絵画という手段で表現していると言える。

### 第20項 その他の神画について

本項では、以上で分析した19種類の神画以外の神画に描かれる内容について紹介する。

#### 20-1. 禁齋<sup>56</sup> 神画に描かれる内容について

図7-26 神画は小サイズの神画である。神画所有者である祭司の趙乙昇氏によれば、この神画はどの神が描かれているのか不明であるため、実際の儀礼において用いられていないという。*Yao ceremonial paintings*の中で、「Kiem Tsei 禁齋」と呼ばれる神画に類似している。その神画には、ミエンの服装を着る女神は犠牲用の豚を屠るのを監督する場面が描かれており、また神画全体の構図と神画に描かれる内容の一部<sup>57</sup>は、趙乙昇氏が持っている図7-26の神画と相似する。よって、筆者が図7-26は「Kiem Tsei 禁齋」と同じ種類の神画だと判断し、本論では「禁齋」の名称を引用した[Lemoine 1982: 142-145]。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

図7-26の構図としては、上下二つの部分に大きく分かれている。上部の中央には、ミエンの服装を着ている女神が描かれ、下部には調理する場面が描かれている。

女神の頭部に円環状の光背が配され、頭に赤色の頭巾をし、藍色の上着を着、黒色と赤色のスカートを穿き、座る姿勢となる。神画の上部は破損しているため、細部まで読み取ることはできない。

神画下部に描かれている調理の場面は、さらに上中下の三つの部分に分れている。上部には、黒色の服を着た二人の男性が杵を持って臼で餅を搗いている。中部の藍色の服を着た3人は、左から右へそれぞれに餅を丸めており、薪を肩に担いで運んでいる。下部には竈が描かれ、竈の前に藍色の服を着る人と、黒色の服を着る男性が立っている。その右側にてんびん棒を担いで水を運ぶ男性が描かれる。

以上の読み取りから、「禁齋」神画の構図及び神画に描かれる内容は、「監齋大王」神画の構図と神画に描かれる内容と非常に類似していることが分かる。Lemoine は、*Yao ceremonial paintings* の中で、通常「Kiem Tsei 禁齋」神画の上部にミエンの服装を着る女性が描かれるが、時には剣を振る男性が描かれることもあると述べている[Lemoine 1982: 142]。「監齋大王」神画の読み取りによって、Lemoine が言っている剣を振る男性は、「監齋大王」を指していると考ええる。「監齋大王」神画は「禁齋」神画の大きいサイズの男神版だと言えよう。

### 20-2. 庫官<sup>58</sup> 神画に描かれる内容について

本論の読み取る対象とする「庫官」神画は、全部で3点あり(図5-21, 図6-21, 図7-21)、比較的珍しい神画の種類である。「庫官」神画には庫官の官庁内の様子などが描かれている。

神画の最上部に「庫官左」の文字が記されている(図6-21)。上部に長いテーブルが描かれ、その後ろに黒い冠を冠り、赤色の上着で、黄色(或いは赤色)の裳を穿く官員が立っている。この官員は「庫官」と推測する。「庫官」は左手でテーブル上に置いている文書を押さえ、右腕が内側に約120度曲げ、手に筆を握っている。向かってその左右には各一人の従者が立っており、右側の従者も「庫官」と同じように筆を握っている。

テーブルの前には、人物が跪いており、両腕が開いて手に書類のようなものを掲げ、「庫官」に何かを上奏している。向かってこの上奏者の左右には、それぞれ椅子に坐る一人の官員装束の者が描かれている。向かって左側の者は黒色(或いは藍色)の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は内側に曲げて腰部に置く。左腕は高く上げ、右側にいる官と話をかけている姿勢となる。右側の官は青緑色の上着を着、赤色の裳を穿き、左側にいる官を向き、話を聞く姿勢となる。

神画の中央の左右には、両面の壁が描かれている。そこは「庫官」の官庁に入る正門であると考えられる。正門のところに一人の役人と一人の従者が描かれている。

神画の下部には、庫に入れる貨物を点検している様子が描かれる。向かって左側にはテーブルが描かれ、テーブルの後ろに一人の役人が立っており、左手でテーブル上の紙を押さえ、右腕は内側に曲げ、手に筆を握り、運んできた貨物を記入している。右側に二人の従者と大きな箱が描

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

かれ、従者は左側にいる役者を向き、確認できた貨物を報告する姿勢となる。神画の最下部には、貨物は担ぐ者、貨物を運ぶ馬を1匹引いている者が描かれる。

### 20-3. 王姥<sup>59</sup> 神画に描かれる内容について

ミエンの祭司によれば、「王姥」神画は、またの名を「王姆娘娘」神画ともいう。この種類の神画に関して、筆者は湖南省永州市藍山県と江華瑶族自治县で未だ見たことがない。主に広西壮族自治区恭城瑶族自治县地域で用いられている神画である。ミエンの儀礼神画の中には、女神を主神として神画に描いているのは非常に珍しい。筆者の集めた資料の中に、この種類の神画は2点(図6-22, 図7-22)あり、神画に描かれる内容は次のようである。

王姥神画の構図としては、中央に王姥が大きく描かれ、王姥の後ろには一人の女官がおり、神画の下部には3人の武将の装束をしている男性の脇侍が描かれている。また、図6-22の最上部には「王姥右」の文字が書かれているのも見られる。

王姥は向かって右を向き、花模様の上着を着、スカートを穿き、若々しく微笑んで瑞雲の上に乗る姿勢となる。左腕は内側に曲げ、手には笏を持ち(図7-22)、或いは瓢箪状の団扇を持つ(図6-22)。右腕は内側に曲げ、手は手訣を結ぶ。「雲髻」という雲型のまげに結び、花や簪をつけている。

王姥の後ろには、瑞雲に乗る一人の女官がおり、手には華蓋を持ち(図6-22)、或いは幡を持っている(図7-22)。下部に描かれる3人の武将は、雲に乗り、前を向いて描かれている。3人もと鎧を着、手に剣を持って高く上げ、防御する姿勢となる。

### 20-4. 四府功曹<sup>60</sup> 神画に描かれる内容について

四府功曹神画には、天府・地府・水府・陽間の4人の功曹が描かれているため、また「天地水陽」神画とも称されている<sup>61</sup>。この神画は、1対2点であり、祭壇に掛ける際に向かって左右並列して掛けるため、本論では「四府功曹・左」と「四府功曹・右」の名称を使って区別する。四府功曹神画のいずれの1点には、必ずどの功曹が描かれると決まっていない。4人の功曹はそれぞれどの功曹であるのかを区別するのは、「献府歌<sup>62</sup>」という題目の記述に詳しく記されているので、以下ではまずその歌の内容を紹介する。

#### 「献府歌」

天府功曹騎何様	天府功曹は何に乗る。
地府功曹騎何兒	地府功曹は何に乗る。
陽府功曹騎何馬	陽府功曹は何馬に乗る。
水府功曹騎何龍	水府功曹は何龍に乗る。
天府功曹騎白鶴	天府功曹は白鶴に乗る。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

地府功曹騎虎兇	地府功曹は虎に乗る。
陽界功曹騎白馬	陽界功曹は白馬に乗る。
水府功曹騎黄龍	水府功曹は黄龍に乗る。
四府功曹騎四様	四府の功曹は4種類の動物に乗り、
飛雲走馬入壇前	速やかに祭壇の前に来臨する。
<後略>	

「猷府歌」に記された内容から、「天府功曹騎白鶴」天府功曹は白鶴に乗り、「地府功曹騎虎兇」地府功曹は虎に乗り、「陽界功曹騎白馬」陽間功曹は白馬に乗り、「水府功曹騎黄龍」水府功曹は黄龍に乗るといった特徴がはっきりと分かる。以下、広西壮族自治区恭城瑶族自治县とタイ北部のミエン村の四府功曹神画に描かれる内容の詳細を述べる。

功曹神画の構図は、1点の神画に二人の功曹が上下に配置して描かれる。

広西壮族自治区恭城瑶族自治县の四府功曹神画は、左右2点の神画に描かれる4人の功曹が中央を向き、左右対象となっている。四府功曹・左(図7-24-1)の上下には、それぞれ虎に乗る地府功曹と龍に乗る水府功曹を描かれる。地府功曹は、赤色の袍を着、左腕は前へ高く上げ、手に一巻きの文書を持ち、前方に差し出しながら急ぎ走る姿勢となる。水府功曹は、藍色の袍を着、左腕は前へ高く上げ、手に一巻きの文書を持ち、同様の姿勢をとっている。右腕は高く上げ、手に刀を持つ。四府功曹・右(図7-24-2)の上下に、それぞれ白鶴に乗る天府功曹と白馬に乗る陽間功曹が描かれる。天府功曹は、藍色の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は前へ高く上げ、手に一巻きの文書を持ち、前へ高く上げ、地府水府と同様の姿勢である。陽間功曹は、赤色の上着を着、黄色の裳を穿き、右腕は前へ高く上げ、手に一巻きの文書を持って同じく差し出す姿で描かれている。左腕は体の後ろに出し、手に剣を持つ。

タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村の四府功曹神画の全体的な構図は、恭城瑶族自治县の四府功曹神画と同じであるが、神画下部に描かれる功曹の顔の向きは、中央ではなく外側を向いている。四府功曹・左(図9-24-1)の上下に、それぞれ白馬に乗る陽間功曹と虎に乗る地府功曹が描かれる。陽間功曹は、赤色の袍を着、左腕は内側に曲げ、手に文書を握る。右腕は体の後ろに出し、手に鎗を持つ。地府功曹は、黒色の上着を着、赤色の裳を穿き、右腕は前へ高く上げ、手に文書を持ち、差し出す姿である。四府功曹・右(図9-24-2)の上下に、鳳凰に乗る天府功曹と黄龍に乗る水府功曹が描かれている。天府功曹は赤色の袍を着、両手で文書を持ち、前へ高く上げ、一つの大きな手に文書を進呈する姿勢となる。この大きな手は天の神の手であると考えられる。水府功曹は赤色の袍を着、左腕を前へ高く上げ、手に文書を持ち、前方に文書を差し出している。背景として、瑞雲が描かれ、四府功曹は雲の中で往来する様子を現している。

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

### まとめ

以上、湖南省永州市藍山県・湖南省永州市江華瑶族自治県・広西壮族自治区恭城瑶族自治県・タイ北部などの異なるミエン地域の11組の神画に描かれる内容の分析を通し、異なるミエン地域に用いられる複数の同種の神画に描かれる内容の異同を明らかにした。各種の神画に描かれる内容の異同点はそれぞれの項目の中で詳細に述べているので、ここでは重複していない。ここでは、11組の神画の共通点及び相違点について述べたい。

この11組の神画の最も大きな共通点は、異なるミエン地域においても必ず元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・四府・張天師・李天師・海播・十殿・海播張趙二郎・太尉・総壇の13種類の神画と、趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥の内のいずれか2種類の神画を持っていると考えられる。また、異なる地域にわたる同じ種類の神画に描かれた基本的な内容や主神と脇侍らの特徴もほぼ同じであることが明確にした。このことから、異なる地域のミエンであっても、信仰している神々の体系は同様であると見られる。

相違点について、一部のミエン地域では、その地域しか見られない種類の神画を持っていると見られる。例えば、「王姥」という種類の神画は、広西壮族自治区恭城瑶族自治県のミエンがしかっていない神画である。家の先祖が描かれた神画は、タイ北部のミエンがしかっていない神画である。また「庫官」という種類の神画も、広西壮族自治区恭城瑶族自治県と、湖南省永州市江華瑶族自治県の最南端に位置する両岔河地域でしか見られない神画である。さらに太尉・海播張趙二郎・総壇・三將軍の4種類の神画で構成した「行師」神画は、湖南省永州市藍山県・湖南省永州市江華瑶族自治県・広西壮族自治区恭城瑶族自治県の三つの地域のミエンがほとんどこの「行師」神画をセットとして持っているが、タイ北部のミエンでは同じように使っていない。このような相違点から、神画の地域的な特性が見えてくる。

### 第4節 神画に書かれる銘文について (別冊・表20)

表20に示したように、本論で取り扱う11組の神画資料の中には、銘文が書かれている神画が十数点はあると見られる。1組の神画の中には、大体1点或いは2点の銘文が書かれる神画が入っていることが分かる。また、銘文が書かれる神画は、主に元始天尊、太尉、海播張趙二郎、総壇神画であると分かる。元始天尊神画は「三清兵馬」神画の内の1点である。それから太尉神画、海播張趙二郎神画、総壇神画は「行師」神画の内の3点である。よって、神画はセット単位で制作されると推測する。本節では、銘文の分析から、神画の制作及び制作の目的を考察して行きたい。

#### 第1項 銘文内容の分析

通常銘文は神画の表に記されている。しかし、事例により銘文が長ければ神画の裏に記される

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

場合もある。本章の「第1節 分析に用いる神画資料について」では、既に各神画に記される銘文を紹介し、また日本語訳も付け加えてある。以下では、銘文をもう一度挙げるが<sup>63</sup>、日本語訳を重複して掲載しない。

### 元始天尊神画 (図 1-1)

<sup>(2)</sup> 福主信士盤法有合家合■/<sup>(3)</sup> 癸心彩画功德三位神■供奉/<sup>(4)</sup> 惟願人癸千丁糧進万石/<sup>(5)</sup> 丹青楊子蘭/<sup>(6)</sup> 于光緒二十年八月之日大吉

### 太歳<太尉>神画 (図 1-17)

<sup>(1)</sup> 今據大清天下湖南省直桂陽州藍山県仙政郷/<sup>(2)</sup> 信仁福主盤法祿夫妻/<sup>(3)</sup> 謫議癸心得買神像一堂四軸言定■錢壹兩五分正以後伝與後人/<sup>(4)</sup> 子孫四方相請香火不斷馬脚不停香火通行萬事大吉福有所歸/<sup>(5)</sup> 丹青弟子臨武周国珍/<sup>(6)</sup> 道光九年廿八日開光大吉

### 海播張趙二郎神画 (図 2-16)

<sup>(1)</sup> 太清国湖永州府道州寧遠県先進郷大地名紅江源小地名■僚坪立宅居住/<sup>(2)</sup> 信仕福主盤法念合家眷等/<sup>(3)+(5)</sup> 自癸誠心命請常寧県清李功和李功貴作彩画神像四軸/<sup>(4)</sup> 福所歸子孫為記/<sup>(6)</sup> 皇上嘉慶十一年十月卅日開光大吉々良黄

### 海播張趙二郎神画 (図 3-16)

<sup>(2)</sup> 信士行教弟子趙法興妻趙氏合家/<sup>(3)</sup> 癸心請匠彩画行壇功德四軸/<sup>(4)</sup> 子孫永遠十方応用■/<sup>(5)</sup> 常寧県丹青楊画又兄弟■/<sup>(6)</sup> 皇清乾隆二十五年庚辰歲十一月二十一日

### 総壇神画 (図 3-19)

<sup>(3)+(5)</sup> 丹青請陵武周国金癸売行像一堂銀錢一仟三百文/<sup>(4)</sup> 買進用保■■/<sup>(6)</sup> 嘉慶廿年五月初五日

### 元始天尊神画 (図 4-1)

<sup>(1)</sup> 今在下梅住居/<sup>(2)</sup> 信仕香主馮法全妻趙氏所生男合家眷等/<sup>(3)</sup> 癸心彩画大堂一十式軸/<sup>(4)</sup> 日後家下人丁興旺五谷豐登香門大旺百事大吉子孫永遠為記福友所歸/<sup>(5)</sup> 丹青王家義画/<sup>(6)</sup> 道光十六年丙申十一月十七開光吉旦

### 元始天尊神画 (図 5-1)

因社會形勢■■下無法保留原有神像父親將画毀■/<sup>(3)+(5)</sup> 後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅花郷大營村丹青師父楊呈應到大田灣黄法靈家照底彩書滿堂聖像■■十七尊天橋一条承■家主黄法顯時值■■■幣■/<sup>(6)</sup> 于公元一千九百九十五年季春月吉日成工

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

### 元始天尊神画 (図 9-1)

馮<sup>(2)</sup>法官/<sup>(3)</sup>誠心敬請匠人彩畫神像大小堂十七張功德文銀二十九兩■六錢正/<sup>(4)</sup>從今以後神像有灵有聖、保福保佑家主人日興旺永平安無災無難喜洋洋人財兩旺年年進五谷豐登滿庫倉六畜牛馬滿山崗福寿双全滿家堂師門興旺利八方子孫千年萬代應用可也/<sup>(6)</sup>+<sup>(5)</sup>皇<sup>(6)</sup>上民國五年丙辰歲七月匠人潘德源黃道日開筆大吉利也

### 元始天尊神画 (台北世界宗教博物館所蔵神画)

大<sup>(6)</sup>清道光貳拾陸年十一月初十/<sup>(2)</sup>家<sup>(2)</sup>主李法案夫婦二姓/<sup>(3)</sup>+<sup>(5)</sup>誠心請到賓州丹青匠人黃元星黃元昌兄弟二人彩画滿堂神像一拾三幅/<sup>(4)</sup>典後祈飽和家人丁興旺人口平安十方相請南北來迎五谷香煙不斷馬脚不停/<sup>(3)</sup>資匠<sup>(3)</sup>價銀肆兩正

### 元始天尊神画 (図 11-1)

法<sup>(2)</sup>財趙金財合家/<sup>(3)</sup>謫議誠心敬請彩画錦衣/<sup>(4)</sup>恭奉祖宗保佑家堂人丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉錢財牛馬滿山莊更招外處田壕宅兒孫為宰上朝堂/<sup>(6)</sup>皇<sup>(6)</sup>上光緒三十三年歲次丙午■■■■■画■■■月十二日開光吉利榮華貴/<sup>(3)</sup>+<sup>(5)</sup>請<sup>(3)</sup>廣西省思恩府武侯縣永寧鄉大漁村潘■■画大小堂十張謝師紅銀貳拾兩六錢正/<sup>(4)</sup>匠保主人增福寿福祿齊天子連孫

以上挙げた 10 点の銘文は、それぞれの銘文に括弧で番号を付けたように、内容から六つの部分に分けられる。

(1)では、神画の制作を依頼する者の住所が示される。(2)では、夫妻或いは一家の代表である依頼者の法名が示される。(3)では、具体的に新たに制作を依頼した神画の点数、及び制作の費用が示される。(4)では、神々に対する祈願の内容が示される。(5)では、絵師の名前などの情報が示される。(6)では、神画が制作された日の日付、或いは神画の開光儀礼が行われた日付が示される。

## 第2項 銘文から見た神画の制作

前述したように、神画を制作に関わることは、銘文の番号(3)を付けたところにあたる。以下、元始天尊神画と太尉・海播張趙二郎・総壇神画に書かれる銘文の(3)にあたる部分を取り上げてそれぞれ考察して行く。

### 2-1. 元始天尊神画に書かれる銘文の(3)にあたる内容

図 1-1 : 発心彩画功德三位神 (3 柱の神) ■ 供奉

図 4-1 : 発心彩画大堂 (大きなセット) 一十式軸 (12 軸)

図 5-1 : 後于乙亥歲仲春月請得鐘山縣紅花郷大當村丹清師父楊呈應到大田湾黄法靈家照底

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

彩書満堂<sup>64</sup> 聖像■ ■十七尊天橋一条 (神画 17 点、天橋 1 点) 承■家主黄法頭時值■ ■ ■  
幣■

図 9-1 : 誠心敬請匠人彩畫神像大小堂十七張 (大小セットの神画 17 点) 功德文銀二十九兩  
■六錢正

台北世界宗教博物館所蔵元始天尊神画 : 誠心請到賓州丹青匠人黄元星黄元昌兄弟二人彩  
画満堂神像一拾三幅 (神画 13 点)

図 11-1 : 謫議誠心敬請彩画錦衣請広西省思恩府武侯県永寧郷大漁村潘■画大小堂十張 (大  
小セットの神画 10 点) 謝師紅銀貳拾兩六錢正

以上では、図 1-1・図 4-1・図 4-1・図 5-1・図 9-1・図 11-1 と台北世界宗教博物館が所蔵する元始天尊神画に記される銘文の(3)にあたる内容を取り上げた。この部分の内容から、図 1-1の元始天尊神画は3点1組として制作され、図 4-1・図 5-1 と台北世界宗教博物館所蔵の元始天尊神画は十数点1組として制作されたことが分かる。また、図 9-1 と図 11-1 は大小の神画セットをまとめて制作されたことが分かる。ここの十数点1組となる「大堂」或いは「満堂」の神画は、神画のセットである「三清兵馬」神画だと推断する。「小堂」は、恐らく「行師」神画を指しているかもしれない。

### 2-2. 太尉・海播張趙二郎・総壇神画に書かれる銘文の(3)にあたる内容

太歳<太尉> (図 1-17) : 謫議発心得買神像一堂四軸 (神画 1 セット 4 軸) 言定■錢壹兩五分正以後伝與後人

海播張趙二郎 (図 2-16) : 自発誠心命請常寧県清李功和李功貴作彩画神像四軸 (神画 4 軸)

海播張趙二郎 (図 3-16) : 発心請匠彩画行壇功德四軸 (行師神画 4 軸)

総壇 (図 3-19) : 丹青請陵武周国金発売行像一堂 (行師神画 1 セット) 銀錢一仟三百文

以上では、「行師」神画という神画のセットに属する太尉・海播張趙二郎・総壇神画に記される銘文の(3)にあたる部分を取り上げた。この部分の内容から、太尉・海播張趙二郎・総壇神画は、4点1セット単位として制作されることが分かる。また、「行壇」「行像」の言葉は正に「行師」神画を表していると考えるので、銘文に記される4点の神画は間違いなく「行師」神画を指していると確信できる。

以上では、各神画に書かれる銘文の考察によって、神画を新たに制作される際に、セット単位として制作されることが明らかにした。

### 第3項 銘文から見た神々に対する祈願

神画に書かれる銘文には、神々に対する祈願があり、それは銘文の番号(4)を付けたところに



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

あたる。祈願文の長さはまちまちであるが、主に家の人々の平安を守ってくれるように、子孫が増えるように、豊作できるように、家畜が群になるように、福が来るように、財産が増えるように、という内容が記されている。神画を新たに制作することを通じ、神画に描かれる神々がもう一度綺麗に描かれたので、これは神々に喜ばせることであると考え。この際に神々に対して祈願すれば、きっと叶えると考えていることが見える。よって、これらの祈願は神画を新たに制作する真の目的だと考える。

本節では、神画に書かれる銘文の内容を分析し、特に銘文中の神画の制作及び祈願に関する部分も取り上げて見てきた。このような銘文は、単に神画の制作と関わる情報を示すばかりでなく、神画の開光儀礼を済んだ証、神々に対して願をかけた証であると考えられる。

### 第5節 神画に描かれる神々について

以上では、異なるミエン地域から収集した11組の神画に描かれる内容を詳細な読み取りを行った。読み取りによって、この11組28種類の神画には、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・王姥・大海播・海播張趙二郎・太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・監齋大王・禁齋・天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹・十殿・家先などの神々が描かれていることが明らかとなった。神画に描かれることは、これらの神々がミエンの信仰している神の世界において高い位に立っていることを意味していると考え。

本節では、神画の読み取りを通して見た神々の区分する方法、神々の位、道教的な影響、ミエンらしさについて述べたい。

#### 第1項 神画に描かれる神々の区分について

神画に描かれる内容の読み取りを通じ、一部の神の冠や衣服などのスタイルが同様であることに気づいた。神画に描かれる神々を簡単に見分けるために、以下では、区分することを試みる。

神画に描かれる神々の冠・服装・持物・乗物などの特徴から分析を行うと、三清・帝王・天師・神将・海播・功曹・その他に分類できることが判明した。

三清は、御座に座しており、龍と瑞雲模様の袍を着る。髪は頭頂に結び上げ、金冠を冠る。神画において中央に位置し、その下部の左右に各一人の脇侍が控える。この類にあたる神々は、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊である。また、元始天尊は黒地の袍を着、靈寶天尊は緑地の袍を着、道德天尊は紺色地の袍を着るという出で立ちが特徴である。

帝王は、御座に座しており、冕を冠り、圭を持つ。この種類にあたる神々は、玉皇・聖主・天府・地府・水府・陽間・十殿である。玉皇と聖主神画において、玉皇と聖主は中央に位置し、その下部の左右に各一人の脇侍が控える。天府・地府・水府・陽間を描く神画は、対となるものである。1点にいずれの二神が描かれ、それぞれに神画の上部と下部に位置する。十殿神画におい

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

て、10柱の閻王と共に地獄の風景が描かれる。

天師は、立っており、八卦袍を着、髪冠を冠り、圭を持つ。神画において中央に位置し、下部に脇侍が控えてない。この類にあたる神々は、張天師・李天師である。

神将は、太尉・將軍・元帥に区分する。太尉は、武官の冠を冠り、白馬に乗り、赤色の袍を着、剣を持つ。將軍は、兜を冠り、鎧を着、馬に乗り、武器を持つ。元帥は武将の衣服を着、武器を持つ。この類にあたる神々は、太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥である。

海幡は、冠を冠らず、額に赤色の縄を縛り付け、頭両側のこめかみのところに各1枚の符を挟む。虎皮の肩掛けを付け、胴着を着、赤色の裳、あるいは赤色のズボンを書く。素足で、足首から膝まで白地の脚絆を巻く。海幡にあたる神々は、大海幡と海幡張趙二郎である。大海幡神画に刀梯を登る場面が描かれており、海幡張趙二郎神画には描かれていないので、簡単に見分ける。

功曹は、鶴・虎・馬・龍に乗り、手に文書を持って進呈する姿勢となる。功曹にあたる神々は、天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹である。功曹を描く神画は、対となるものである。1点にいずれの二人の功曹が描かれ、それぞれに神画の上部と下部に位置する。

以上述べた神々の他には、今の段階において分類できない神々もあるので、「その他」の類に入れた。

表 21 神画に描かれている神々の区分表

区分	容姿の特徴		区分にあたる神々の名称
三清	御座に座しており、龍と瑞雲模様の袍を着る。髪は頭頂に結い上げ、金冠を冠る。		元始天尊※・靈寶天尊※・道德天尊※
帝王	御座に座しており、冕を冠り、圭を持つ。		玉皇※・聖主※・天府・地府・水府・陽間・十殿
天師	立っており、八卦袍を着、髪冠を冠り、圭を持つ。		張天師・李天師
神将	太尉	武官の冠を冠り、白馬に乗り、赤色の袍を着、剣を持つ。	太尉※・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥
	將軍	兜を冠り、鎧を着、馬に乗り、武器を持つ。	
	元帥	武将の衣服を着、武器を持つ。	
海幡	冠を冠らず、額に赤色の縄を縛り付け、頭両側のこめかみのところに各1枚の符を挟む。虎皮の肩掛けを付け、胴着を着、赤色の裳、あるいは赤色のズボンを書く。素足で、足首から膝まで白地の脚絆を巻く。		大海幡・海幡張趙二郎※
功曹	鶴・虎・馬・龍に乗り、手に文書を持って進呈する。		天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹
その他	分類以外の神々		王姥※・監齋大王・禁齋・家先

注：※は、神画の下部の左右に脇侍が描かれることを示す。

### 第2項 神画の読み取りから見た神々の位について

神画に描かれる神々及びその脇侍たちの顔の向きによって、その中の一部の神の位を推断することができる。

元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主神画に描かれる主神は、神画において中央に描かれ、顔は正面を向き、神画の下部の左右に各一人の脇侍が描かれている。このように描かれる神々は、顔を横向きにし、また脇侍を持っていない神々（張天師・李天師・天府・地府・水府・陽間・大海幡・海幡張趙二郎・太尉・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・監齋大王など）より位が高い神であると推断できる。

それから、脇侍らの顔の向きを見ると、元始天尊の脇侍は左右の両側から真ん中を向き、靈寶天尊の脇侍は右から左を向き、道德天尊の脇侍は左から右を向く、玉皇の脇侍は右から左を向き、聖主の脇侍は左から右を向くように描かれる。脇侍らの顔の向きによって、この5神の中で、元始天尊が最も中心的な神であり、最高位の神であると推断できる。その左に位置する靈寶天尊は第2位、その右に位置する道德天尊は第3位、また靈寶天尊の左に位置する玉皇は第4位、道德天尊の右に位置する聖主は第5位であると配列することができる。

この位の配列は、総壇神画からも見られる。本章の第3節「第20項 総壇神画に描かれる内容の異同」で述べたように、総壇神画には、上から下まで九つの位階に分けて描かれている。他の種類の神画に描かれる一部の神々は、この九つの位階のいずれかの位置に配置されている。総壇神画の最も上位だと思われる一番上となる第1の位階に、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の5神が描かれ、その中央の位に元始天尊、左の位に靈寶天尊と玉皇、右の位に道德天尊と聖主が配置される。この配置から、ミエンにとって三清である元始天尊・靈寶天尊・道德天尊は最も上位の神であり、その次は玉皇と聖主となる。さらに三清の中では、元始天尊の位が最も高いということがはっきりと見えるのである。総壇神画から見たこの5神の位は、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主神画に描かれるこの5神及び脇侍らの顔の向きによって推断した位と完全に一致している。

元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・聖主の他には、総壇神画の第6位階の中央に上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍が配置され、第7階層の中央の位に太尉が配置され、第8階層の左右の位に鄧元帥などの6柱の元帥神が配置されることが見られる。総壇神画から、ミエンが、自ら信仰している神々に対し、明確にその位階を区別していることが見られる。

### 第3項 神画の道教的な影響

ミエンは持っている神画に描かれる元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇などの神々とは、民間道教のパンテオンのエラルキーの最上段を構成するところの、道教の「十八主神」であることが判明したとされる[竹村 1981: 160-161]。ミエンの儀礼神画に道教神を描くことは、始めから

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

道教の影響を受けていることを示していると考えられる。

本論で取り扱う 11 組の神画に描かれた、元始天尊・靈寶天尊・道德天尊・玉皇・張天師・上元唐將軍・中元葛將軍・下元周將軍・趙元帥・馬元帥・王靈官・鄧元帥・十殿などの神々は、道教系の神であると判断できる<sup>65</sup>。神画に描かれたこれらの神々の容貌・髪型・衣裳の様式なども、道教絵画の同様の名称を持つ神々と相似しているばかりでなく<sup>66</sup>、特に、湖南省永州市藍山県及び江華瑶族自治県のミエン地域の神画は、この省の民間絵画の画風と非常に類似<sup>67</sup>していることから、ミエンの祭司が持つ儀礼神画は、道教の神画の様相を受け入れていると同時に、その地域の民間絵画からの影響も受けられていると考えられる。さらに、神画からは道教の閩山派及び梅山派の影響を受けていると見做される。本論で取り扱う神画の中には、閩山教の信仰神の王姥<sup>68</sup>が描かれる神画がある。また、大海播神画に黄色の幡を付けた竹竿及び刀の梯子を登るシーンが描かれている。これは閩山教の「建幡伝度<sup>69</sup>」の際に行われる「上幡竹<sup>70</sup>」と「上刀梯<sup>71</sup>」という二つの儀礼を表していると考えられる。すなわち王姥神画の所持及び、大海播神画に描かれている内容は、閩山教の影響を受けている証であろう。さらに、総壇神画(図 1-19)の一番下となる階層に、梅山教の信仰神である張五郎<sup>72</sup>が描かれる点については、梅山教の影響によるものであると考える。ミエンなどの西南少数民族の宗教信仰において、梅山教や閩山教などの教派の名称が見られることから、道教と少数民族の宗教文化は互いに浸透しているのであるとされる[張澤洪 2010:140]。こうした点からミエン神画に描かれた梅山教と閩山教の神々は、ミエンの宗教文化と梅山教や閩山教が融合した結果であると言える。

また、神画の構図に注目すると、主神は中央に大きく描かれ、脇侍は下部の左右、あるいは主神の後ろに配置している点については、道教絵画の構図とほぼ一致している。特に注目したいのは、総壇神画の構図である。総壇神画の複数の階層を用いて神々の階位を表すという構図の方法は、道教神仙系譜の『洞玄靈寶真靈位業図』と非常に類似している。そうした点からも、ミエンの神画は、道教の影響を大きく受けていると言える。

このように神画に描かれた神々、構図に注目するとミエンの儀礼神画は、ミエン自身の宗教文化のみによって描かれているのではなく、梅山教、閩山教、そして道教の影響を受けているのである。

### 第4項 神画から見た過山系ヤオ族(ミエン)の特色

ミエンの伝承している儀礼神画は、道教の影響を受けている点については上記した。しかし、あくまでも影響を受けているのであり、道教の神画と同一のものではなく、ミエン自身の特色を持っている。

儀礼神画を見ると、直観的に感じられるのは、赤色が非常に多く使われている点が指摘できる。赤色は人間の気持ちを高めることができ、注意を引きやすく、また中国古代において魔除けや吉祥などの意味を持っているとされる[黄遠ほか 2009:49]。このような儀礼神画は儀礼時に祭壇に掛けると、人目を非常に引き、荘厳な雰囲気を作ることができる。特に、元始天尊・靈寶天尊・

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

道德天尊・玉皇・聖主の5神の背後に、深紅の大きな火焰状の光背が描かれる。赤色の運用及び大々的な表現手法を通し、この5神は、ミエンの奉ずる神々中において位と法力が高いことを表現していると考えられる。このような光背の描き方は、道教絵画や漢族の民間絵画や仏画などいずれも使われていない表現の手法であり、ミエンが作り出した絵画の独特の風格を持っているのである。

ミエンの儀礼神画には、道教神の他に、ミエンが独自に奉ずる神が描かれている。即ち、ミエンの祭司の祖とされる李天師、ミエンの祭司に術を伝えた人物とされる大海幡<sup>73</sup>、授法する祖師である太尉<sup>74</sup>、監齋、家先（家の先祖）などの神々である。ここで注目したいのは、この中の監齋と大海幡が描かれた神画である。

最もミエン的特色を持つ神画というならば、やはり監齋神画であろう。何故ならば、監齋神画は、ミエンの民族衣裳を着た数人の男女が描かれている。描写の内容は、竈の前で火吹き竹を使う人物、てんびん棒で水を運び、薪を切り、堅杵を持って餅を搗き、丸まるめ、供物とする餅を作っている場面が描写されている。描かれた人々は分担し、それぞれの異なる仕事をこなしている様子がよく表現されている。

大海幡神画には、上記したように、刀の梯子を登る「上刀梯」儀礼の場面が描かれている。「上刀梯」儀礼は、ミエンの度戒儀礼が行われる際に必ず行われる儀礼科目であり、受礼者が乗り越えなければならない試練の一つである。大海幡神画には、大海幡の他に、儀礼の場である雲台、そこに掛ける十二本の刀で作られた刀梯、刀梯を登る正装の受礼者、雲台の上に立つ人物などが描かれる。さらに、雲台の上に立つ人物は、角笛や師棍などの法具を持っているので、儀礼を行う祭司であると考えられる。雲台の下に跪く正装の受礼者、チャルメラを吹奏する者、ドラを鳴らす者などの内容が描かれ、「上刀梯」儀礼を行う場面を生き生きと描写している。各人の目線は刀梯を登る受礼者に集まり、儀礼に注目している様子がよく表現されている。

監齋と大海幡神画に描かれるように、ミエンの儀礼時の調理風景及び彼らが伝承している儀礼の内容を生き生きと絵画で表現することは、ミエン儀礼神画の代表的な特色であると考えられる<sup>75</sup>。

こうした神画に描かれた神々の持物からもミエン独自の特色が見えてくる。神画に描かれる内容の分析により、太尉や海幡張趙二郎などの神画に描かれる主神及び脇侍らは、酒盃や法具の角笛を持って描かれることが見られる。酒盃はミエンの儀礼時に神に献ずる酒を入れる器として使われるだけでなく、茶油を入れて灯明にし、ミエンの通過儀礼「掛三灯」「度戒儀礼（掛十二盞大羅明月灯）」の際に掛ける灯りとして使われる。角笛は祭司が天門を開く「開天門」儀礼の際に吹く重要な法具であり、また祭司は天門を開くという最高レベルの呪法を行うことができる能力も示していると考えられる。すなわち、酒盃を持って描かれた神々は、祭司の師であることを象徴しており、角笛を持つと描かれるその神の脇侍らは、師に従う祭司自身を象徴していると考えられる。道教の神画では、元始天尊は丹丸（丸形の練薬）、靈寶天尊は如意、道德天尊は団扇、文官は圭、武官は様々な兵器を持つという特徴であるが、このような酒盃と角笛のような持物を描かれない。こうした点からもミエン儀礼神画自らの特色が見えてくる。

ミエンの儀礼神画を見る第一印象という点、その画風が漫画のようで、絵師の能力によって作

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

画技術の優劣は大きな差が見受けられる。本論で取り扱う 11 組の神画資料の中には、タイ北部 ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村の神画(図 9-1~図 9-24-2)は、表情の気高さ、姿態の違い、神々の個性が鮮明に表現されている。そして人物の眉毛や髭の線は細やかに処理され、画家の極めて高度な作画技術を表している。しかし、湖南省永州市江華瑶族自治县両岔河村(図 5-1~図 5-21)、広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村(図 7-1~図 7-26)、広西壮族自治区恭城瑶族自治县三江郷養牛坪(図 8-1~図 8-21)の神画は、比較的稚拙であり、素人の絵師が描いたものだと推断できる。また、異なるミエン地域における同種の神画に描かれる内容の読み取りから、同じ種類の神画に描かれた同一人物であっても衣裳の色は、完全に一致しないことが見いだされる。例えば、周知されているように、道教神の元始天尊は黒色の衣を着ている。そして、この衣裳の色についてはミエンの儀礼文献にも明記されている<sup>76</sup>。しかし、ミエン儀礼神画の元始天尊神画においては、黒色・赤色・灰色・深緑などの色が使われて描かれることが見られる(表1 元始天尊神画に描かれる内容の異同)。これら神画から読み取れる情報から、儀礼神画を描く絵師は、神画に描かれている神々のことや儀礼文献に記されていることなどに関して精通しているとは言えない。そして、絵師の作画技術が如何に下手であっても、描き間違えであっても、ミエンの宗教信仰及び神画の使用に何の影響も与えていない。こうした点から、ミエンの寛容性が見えてくる。

### [注]

1 Lemoine は、*Yao Ceremonial Paintings* の中で、タイの神画を種類毎に章を分け、神画に描かれている神々は何のような神であろうかについて考察し、神々の装束・姿勢・服装などについて紹介した[Lemoine 1982]。黄建福は、学位論文「盤ヤオ神像画研究-広西金秀県道江村古堡屯の盤ヤオ神像画を事例として」の中で、広西金秀県道江村古堡屯の神画(1セット)を事例として、神画に描かれている内容及び神画の一般的な特徴について述べていた[黄建福 2008: 18-42]。筆者は、学位論文「ヤオ族儀礼神画の研究-中国湖南省永州市藍山県匯源郷湘藍村を事例として」の中で、湘藍村に住む祭司の趙金付氏氏が所有する神画(1組)をトレースし、神画に描かれる内容を詳細に読み取った[譚静 2012]。

2 この地図は、百度地図に手を入れて調査地の地名を加えたものである。<http://map.baidu.com/>

3 儀礼に用いられる神画は、必ず1セット単位として用いられる。儀礼を行う祭司の能力と分担する役割み合わせて「行師」神画あるいは「三清兵馬」神画を使用する。儀礼において神画はどのように用いられたのかについて、本論第6章第3節第2項「儀礼内容から見た神画の使用」で詳しく述べている。

4 この神画の名称に関しては、2011年11月に筆者は聞き取り調査の際に、趙金付氏は「太歳」神画であるといった。しかし、神画の上部には「太尉」の字が書かれている。

5 天地水陽神画は、また四府功曹とも呼ぶ。神画に、天府、地府、水府、陽間の四人の功曹が描かれる。神画は1対となるものであり、1点の神画に、功曹が二人ずつ描かれている。

6 神奈川大学ヤオ族文化研究所所蔵資料である。写真番号: IMG\_8341~IMG\_8440 撮影者: 廣田律子。

7 中国では、1958年に人民公社の高級社を統合して農村に設けられた。公社組織は人民公社、生産大隊、生産隊からなる三級所有制をとっている。生産大隊は、生産隊より大きな公社組織である。([『中日大辞典』1968: 1545])

8 現地の書表師である。伝統儀礼の際に、儀礼文書を作成することを担当する人である。

9 度戒儀礼は、宗教職能者としての最高位を得る儀礼である。趙金付氏によると、宗教職能者は、掛灯儀礼を経てから「行師」神画を所有することができ、度戒儀礼を経てから「三清兵馬」神画を所有すること

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

- ができるという。また、もしこのことを無視して神画を所有する場合は、必ず害を及ぼすという。
- 10 棒形の法具であり、先はとがっている鉄を付けている。
  - 11 この地図は、百度地図に手を入れて調査地の地名を加えたものである。<http://map.baidu.com/>
  - 12 盤王祭は、旧暦 10 月 16 日（盤王誕生日）に行われるヤオ族の祖先祭祀活動である。
  - 13 ここの名称は、神画の裏面に記された名称の転写したものである。
  - 14 ここの名称は、神画の裏面に記された名称の転写したものである。
  - 15 ここの名称は、神画の上部、及び裏面に記された名称の転写したものである。
  - 16 この地図は、百度地図に手を入れて調査地の地名を加えたものである。<http://map.baidu.com/>
  - 17 ここの神画の名称は、主に裏面に記された名称の転写したものである。
  - 18 1970 年代前半、文化大革命のさなか中国で展開された、林彪と孔子を批判する運動のこと。孔子及び孔子が説いた儒教、そして儒教を復活させようとする者とされた林彪が激しい批判の矢面に立たされた。[矢 1989]
  - 19 湖南省永州市藍山県の祭司の趙金付氏によれば、神画は兵馬の 1 種であるという。従って、他の祭司が持っている神画を自分の物にすることは、他人の持っている兵馬をもらうことである。もらった兵馬を自分の兵馬と合わせて一つにならなければならない。このために行われる儀礼は、「合兵合将道場」だという。
  - 20 神画の名称は、調査の際に聞き取ったものである。
  - 21 調査の際に、太尉神画の撮影をしていなかったため、神画の写真データを提示することができない。
  - 22 神画のことを指していると考ええる。
  - 23 光緒丙午年は、光緒 32（1906）年である。記述の紀年は書き間違っていると考える。
  - 24 紅銀は縁起がよいために使われている言葉であろう。
  - 25 本論で取り扱う元帥神が描かれる神画は、把壇師（趙元帥）・馬元帥・王靈官・鄧元帥の 4 種類ある。この類の神画は、2 点 1 対でなければならないが、1 組の神画の中に何れか 2 種類揃えば良いのである。
  - 26 <http://htq.minpaku.ac.jp/menu/database.html#outside> 標本資料目録データベース 国立民族学博物館 H0199302-H0199322
  - 27 天地未だ形成しておらず、万物未だ生成していない。
  - 28 限りがない。はてがない。盡きる所がない。[諸橋 1991 : 433]
  - 29 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号 : A-15a。写真番号 : IMG\_1676s。撮影者 : 廣田律子。
  - 30 「祐(yòu)」字と「玉(yù)」字の中国語発音が近いので、「祐」字と「玉」字は同音異字かもしれない。
  - 31 旒(リュウ)、皇帝の冠の前後に垂れる玉飾り。
  - 32 *Yao ceremonial paintings* に載せている聖主神画写真番号は 48、50、51、53 である。[Lemoine 1982 : 66-67]
  - 33 図 9-6・図 9-7 と図 11-6・図 11-7 神画の所属地域に関して、本章第 1 節「分析に用いる神画資料について」の第 9 項「タイ東北部ヤオ族村神画」と第 11 項「南山大学文化人類学博物館（日本）所蔵西北タイヤオ族神画」を参照する。
  - 34 子供ではないが、西遊記中の哪吒のような頭の上に二つに結び分けたまげをした装束である。
  - 35 窪徳忠によれば、酆都北陰大帝は地獄の長官であるとする[窪 1996 : 207-209]。
  - 36 Lemoine 1982 : PL. 148, PL. 160 [Lemoine 1982 : 98-102]
  - 37 『中国古典文学大系』第 8 巻・『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』「第十四大荒東経」1998 平凡社 497-499
  - 38 明・万暦 21<1593>年に出版された胡文煥の『山海経図』に描かれる「夔」の図である。この『山海経図』は『全像山海経図比較・貳』に収録されている[胡 2003 : 127-198]。
  - 39 趙元帥、即ち玄壇元帥趙公明は、現在でも財神として知らぬ者としてない神である[二階堂 2006 : 200]。
  - 40 『三教源流聖帝佛祖搜神大全』の「趙元帥」の項に、「金輪」を持って称され、西方金の象徴であると記されている[王ほか 1989 : 142]。
  - 41 海幡張趙二郎が乗る「南蛇」という黒龍に関して、請聖書には「南蛇出世」という題目の記述がある（神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号 : A30-a。写真番号 : IMG\_3528。撮影者 : 廣田律

## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

子。その内容は「斬髮底頭帯火車、為吾山上架龍車、修車家主監福主、大海中心是我家、天下幾人不见我、張召二郎到我家、聞説今朝有相請、南蛇焰臨下壇前<後略>」となる。記述中の「大海中心是我家（海の中心には我が家である。）」という字句から、南蛇は海に住んでおり、水との関わりを持っていると分かる。

42 刀梯を掴んで登る姿勢の他には、大海幡は神画の上部の中央に、黒龍に乗る姿勢と描かれる場合もある（図9-14）。そこから、大海幡と海幡張趙二郎とを混同して同一神として扱うことが見られる。

43 「文台」は、儀礼文書を燃やす際に使う台である。その脚は、3本の棒を交差させて縛りづけられたものである。立たせられた脚の上に鉄の鍋を載せてから、「文台」が出来上がる。

44 かみなりさま。

45 総壇神画には、約70柱以上の神々描かれている。よって、他の神画と同じように、神画に描かれる内容を細分化して項目に分けて表で示すことが非常に難しい。この理由で、本論では、総壇神画に描かれる内容の異同を示す表を作らなかった。

46 図3-19には、酒盃ではなく、二つの白色のお椀と、丸い団子を盛った椀が描かれている。また、この神画の下部の中央に銘文が記されている。

47 図11-19に描かれる玉皇と聖主の場所は逆となる。

48 図1-19に描かれるこの二神の髪色・髪型・容貌は、神画に描かれる張天師と李天師に非常によく似ている。よって、筆者は、髪の毛が赤色の方は張天師であり、黒色の方は李天師だと推断する。

49 図11-19に、観音は第四層の中央に描かれている。

50 廣田 2011 の350頁に総壇神画の第四層の中央に描かれる6本の腕を持つのは盤古であると指摘する。

51 廣田 2011 の350頁には総壇神画の第五層の中央の円に描かれる3人の女性が「雲頭龍鳳三娘」であると指摘している。「雲頭龍鳳三娘」は、また総壇図の第4層の左側に描かれる場合もある（図2-19, 図4-19, 図5-19）。図11-19には、第三層の中央の円に、3人の女性ではなく、5人の女性が描かれる。

52 この神の様子・姿勢・冠・服装・持物は、神画に描かれる太尉にそっくりである。よって、この神は太尉だと推断する。

53 手に文書を捧げるのは四府功曹の特徴である。（四府功曹の特徴について、本節の第20項の「20-4. 四府功曹神画に描かれる内容について」に詳述している。）よって、この4人の武官は天府功曹・地府功曹・水府功曹・陽間功曹だと推断する。

54 廣田 2011 の350頁には総壇神画の最下層に描かれる虎・牛・象等に乗る5武将は五猖であると指摘する。

55 李 2014 の24頁には、「洞玄靈宝真靈位業図」神仙系譜の構成について説明し、その第1層の中位の主神は上清派に崇拝される最高の神の元始天尊であると述べている。

56 儀礼神画に描かれる監齋大王は一体どのような神であろうか、不明である。『道教儀禮文書の歴史的研究』によれば、「監齋法師すなわち靈寶監齋大法師真君」という[丸山 2004 : 231]。ここの監齋法師と儀礼神画に描かれる監齋大王は同一神であるかどうか未確認である。

57 内容の一部とは、「Kiem Tsei 禁齋」神画の上部に描かれる民族衣裳を着る女神・下部に描かれる竈・てんびん棒で水を運ぶ人などの内容を指す。

58 庫官は臺南の功德で極めて重要な紙銭を冥界に送る填庫科儀にかかわる神である[丸山 2004 : 385]。

59 葉明生によれば、「王姥」は即ち「王母」であるという。しかし、この「王母」は伝説の「西王母」ではなく、閩山教中の最高位の女神のことを指すと指摘している[葉明生ほか 2007 : 368-375]。

60 功曹は、三清などの高位の神々に文書を届ける伝送の役割の神の一種である[丸山 2004 : 258]。

61 祭司の趙金付氏によれば、四府功曹神画は「天地水陽」とも呼び、即ち天府・地府・水府・陽間の4人の功曹であるという。「陽間」に関して、儀礼文献には「陽間」「陽府」「陽界」と書かれるのも見られる。本論では祭司の言い方に従い「陽間」を使う。

62 神奈川大学ヤオ族文化研究所収集写真資料である。文献番号 : A-30a。写真番号 : IMG\_3457~IMG\_3458。撮影者 : 廣田律子。

63 ここで挙げられた銘文は、図1-17-1と図7-22に含まれていない。図7-17-1と図7-22に記される銘文は短すぎるため、分析の対象に適切ではないと判断したからである。

64 満は、いっぱいになるという意味である。満堂とは、数が多い神画のセットを指しているだろう。

65 野口鐵郎ほか 1996 105, 206, 212, 243, 401, 408, 584, 612



## 第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれる内容の分析

66 大阪市立美術館 2009

67 左 1994

68 葉明生 2004 の 70-75 頁に、閩山教中の信仰される王母(王姥)、許九郎、徐甲、盤古仙師、張趙二郎、張五郎などの神々について詳述している。

69 葉明生 2012 : 15-38。「建幡伝度」は、また「伝度醮」「開戒壇醮儀」とも称され、中国南方各地の民間道教においてよく見られる内部の伝度奏職儀礼であるという。

70 幡を付けられた竹竿を登る儀礼である。

71 刀の梯子を登る儀礼である。

72 葉明生 2013 の 4-5 頁に、湖南省安化や懷化地域の梅山の道壇から見た張五郎の信仰について報告している。

73 廣田 2011 の 352 頁に、廣田律子は、「宗教文献に記された神名や軸に描かれた神像からは道教からの影響を色濃く受けていると言えるが、長年にをかけて道教神が受容されミエンの独自の神体系が形成されている。三清神を最高神とし、太上老君・玉皇大帝・太歳・張天師・馬元帥・唐・葛・周三將軍等道壇に掛けられ祀られる神々との一致をみることができる。一方で張天師の対面に掛けられた李天師はミエンの宗教職能者の祖と考えられ、また海幡もミエン独自の法術を受ける守護神といえる。」と指摘している。

74 本論第5章の第2節「第1項『混沌歌』から見た神画に描かれる神々」で、「混沌歌」に記される太尉に関する記述の分析によって、太尉は法を伝授する祖師であることが判明した。

75 大海幡神画及び監齋神画に描かれているミエンの民俗文化を反映する、「刀梯」を登ること及び祭祀時の調理場面から、ミエンの祭祀活動に用いられる絵画の世俗化傾向が見えるとされる[左漢中 1994 : 43]。

76 譚 2014 の 170 頁に、「混沌歌」という題目の記述を紹介し、元始天尊は「身着黒衣坐龍殿(黒色の衣を着、龍の宮殿に座る)」と描写している。